

国道バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概報

平成7年度

1996. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
建設省四国地方建設局



西浦谷遺跡（南東より）



西浦谷遺跡（西より）



野牛古墳箱式石棺



野牛古墳石棺内遺物出土状況

例 言

1. 本書は、高松東道路建設に伴い平成7年度に実施した西浦谷（にしうらたに）遺跡、幸田（こうでん）遺跡、末（すえ）3号窯跡、野牛（のぎ）古墳の発掘調査及び鴨部・川田（かべ・かわた）遺跡の整理作業の概要を記録したものである。
2. 本調査は、建設省四国地方建設局からの委託を受け、香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 本年度の調査組織は、次のとおりである。

総括	所長	大森	忠彦		
	次長	真鍋	隆幸		
総務	参事	別枝	義昭		
	係長	前田	和也		
	主査	西村	厚二		
調査	参事	糸目	末夫		
	係長	大山	真充		
(発掘)	文化財専門員	森下	友子	(整理)	文化財専門員 森 格也
	文化財専門員	山下	浩行		
	文化財専門員	古野	徳久		
	主任技師	吉田	智		
	調査技術員	森澤	千尋		
	調査技術員	福西	由実子		

4. 調査にあたっては、次の方や機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(順不同敬称略)
角山幸洋 三田文明 津田町建設課 津田町教育委員会 津田町神野自治会

5. 本書の執筆・浄書は調査担当者が行い、編集は古野が担当した。

6. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SA：柵列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SF：窯 SH：竪穴住居跡
SI：段状遺構 SK：土坑 SP：ピット SR：自然河川 ST：墓
SX：性格不明遺構 SZ：テラス状遺構

7. 挿図の一部は、国土地理院地形図（1/2,5000）を使用した。

8. 本文中に使用した例えばN20° Eとは真北方向から20° 東の方向を示すものである。

9. 遺物実測図の断面黒塗りは須恵器を示す。

本文目次

I 平成7年度調査の経緯と経過	1
II 整理業務の概要報告	
鴨部・川田遺跡	2
III 発掘業務の概要報告	
1. 西浦谷遺跡	4
2. 幸田遺跡	28
3. 末3号窯跡	31
4. 野牛古墳	37

挿図目次

鴨部・川田遺跡

図1 調査区割り図	3
図2 出土遺物実測図	3

西浦谷遺跡

図3 調査区割り図	5
図4 周辺遺跡分布図	6
図5 遺構配置図	7
図6 S H02平・断面図	9
図7 S H02出土遺物	9
図8 S H04平・断面図	9
図9 S H04出土遺物	9
図10 S H05平・断面図	10
図11 S H06平・断面図	10
図12 S H07平・断面図	11
図13 S H07出土遺物	11
図14 S H11平・断面図	11
図15 S H14平・断面図	12
図16 S B01平・断面図	13
図17 S B01出土遺物	13
図18 S I 01・02平・断面図	15
図19 S K01平・断面図	16
図20 S K01出土遺物	16
図21 S K02平・断面図	16
図22 S K03平・断面図	17
図23 S K13平・断面図	17
図24 S K19平・断面図	18
図25 S K22平・断面図	18
図26 S K23平・断面図	18
図27 S K24平・断面図	18

図28	S K 25平・断面図	19
図29	S K 30平・断面図	19
図30	S K 50出土遺物	19
図31	S K 30出土遺物	19
図32	S K 50平・断面図	20
図33	S K 71平・断面図	20
図34	西浦谷 1 号墳	22
図35	西浦谷 1 号墳石室平・断面図	23
図36	西浦谷 1 号墳出土遺物	24
図37	S T 01平・断面図	25
図38	S T 01出土遺物	25
幸田遺跡		
図39	幸田遺跡・末 3 号窯跡の位置と周辺の遺跡分布	28
末 3 号窯跡		
図40	調査区割り図	31
図41	S F 01平・断面図	32
図42	東部現地形測量図	33
図43	東部遺構平面図	34
図44	東部地形断面図	35
図45	出土土器実測図	35
野牛古墳		
図46	野牛古墳の位置と周辺の遺跡分布	38
図47	現地形測量図	40
図48	旧地形測量図	41
図49	蓋石除去前石棺平・断面図	42
図50	蓋石除去後石棺平・断面図	43
図51	石棺周辺残存遺構平面図	44
図52	鏡実測図	45
図53	玉類実測図	46

表目次

表 1	平成 7 年度国道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧	1
表 2	鴨部・川田遺跡整理作業工程	2

写真目次

西浦谷遺跡

写真 1	S H 02	9
写真 2	S H 05	10
写真 3	S H 05	10
写真 4	S H 07	11
写真 5	S H 14炭化材検出状況	12

写真 6	S H14焼土・炭化材検出状況	12
写真 7	S H14焼土・炭化材検出状況	12
写真 8	S H14完掘状況	12
写真 9	S B01付近	13
写真10	S I 01・02付近	14
写真11	S I 02付近	14
写真12	S K08	17
写真13	S K10	17
写真14	S K12	17
写真15	S K23	19
写真16	S K24	19
写真17	S K50	20
写真18	西浦谷 1 号墳遠景	21
写真19	閉塞石付近提瓶出土状況	21
写真20	閉塞石検出状況	21
写真21	玄室検出状況	21
写真22	S T 01遺物出土状況	25
写真23	西浦谷遺跡 I 区遠景	26
写真24	西浦谷遺跡 IV 区遠景	26
幸田遺跡		
写真25	遺跡上空より海を望む	29
写真26	遺跡上空よりの俯瞰	30
写真27	調査風景	30
末 3 号窯跡		
写真28	S F 01完掘状況	31
写真29	G 区全景	35
写真30	S K08と S D10	35
写真31	G 区灌木伐採後状況	36
写真32	末 3 号窯跡東部完掘状況	36
野牛古墳		
写真33	調査前の古墳（中央）と津田湾	37
写真34	雨滝山と野牛古墳（中央）	37
写真35	野牛古墳から津田湾にかけての俯瞰	37
写真36	野牛神社基壇（神社解体後）と石棺	39
写真37	石棺周辺地形（調査終了後）	39
写真38	蓋石除去前鏡・玉類検出状況	40
写真39	開棺部埋土トレンチ内鏡検出状況	41
写真40	鏡・玉類出土状況	41
写真41	石棺（蓋石除去後）	43
写真42	鏡（文様面）	45

I. 平成7年度調査の経緯と経過

高松市上天神町から大川郡津田町に至るまでの、国道11号バイパスは「高松東道路」と呼ばれ、この道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査は地域的に2つに分かれる。1つは高松市上天神町～前田東町間で、この区間については昭和63年度～平成5年度に現地での発掘を行い、平成3年度から整理・報告に着手し、本年度に上天神遺跡の報告書を刊行し、事業は完了した。

もう1つの区間である木田郡三木町～大川郡津田町間については、県文化行政課は工事範囲がほぼ定まった平成元年度に全域の分布調査と一部の試掘調査を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地・試掘必要箇所を事業主体である建設省（四国地方建設局香川工事事務所）に示した。この資料には三木町池戸の池上神社近辺の古墳の所在（西浦谷遺跡の一部）及び大川郡津田町神野の野牛古墳の所在が記された。

平成2年度には大川郡志度町において鴨部・川田遺跡の南部・西部の5,000㎡が調査され、翌年度にも継続された。また、志度町において末3号窯跡の発掘も行なわれた。この発掘は窯体部分のみで、物原・灰原は窯体東にある池の中に広がると予想されたため、この部分の発掘が、工事施工に伴い本年度実施されたのである。

その後この区間の発掘は中断し、用地買収が進んだ平成6年度に、本書で報告する西浦谷遺跡、幸田遺跡の試掘調査が県文化行政課によって実施された。西浦谷遺跡の試掘調査は平成6年7月に行なわれ、弥生時代中期末頃の集落遺跡が展開していることが判明した。このため、丘陵中腹から頂部にかけての12,672㎡が調査対象とされた。幸田遺跡の試掘調査は平成6年6月に行なわれ、縄文土器包含層や焼土面が検出されたため、1,600㎡が調査対象とされた。

以上の経緯を経て、本年度は西浦谷遺跡、幸田遺跡、野牛古墳、末3号窯跡の4遺跡が発掘調査されることになった。また、本年度の整理作業は鴨部・川田遺跡の平成2年度発掘部分を対象に行なわれ、報告書は上天神遺跡、六条・上所遺跡を刊行した。

各遺跡の調査面積及び工程は表のとおりである。 (大山)

区分	遺跡名	調査面積 (㎡)	調査工程												
			4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
発掘	西浦谷遺跡	10,400	[調査工程の進行状況を示す横線]												
	幸田遺跡	1,600	[調査工程の進行状況を示す横線]												
	野牛古墳	500	[調査工程の進行状況を示す横線]												
	末3号窯跡	500	[調査工程の進行状況を示す横線]												
	(合計)	13,000	[調査工程の進行状況を示す横線]												
整理	鴨部・川田遺跡	—	[調査工程の進行状況を示す横線]												
	上天神遺跡	—	報告書刊行												
	六条・上所遺跡	—	報告書刊行												

表1 平成7年度国道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査一覧表

II. 整理業務の概要報告

鴨部・川田遺跡

鴨部・川田遺跡は大川郡志度町鴨部に位置している。高松東道路建設に伴い、平成2年度と3年度に合計12,000㎡の発掘調査を実施した。

遺跡は周囲を山で囲まれた鴨部川の作り出した沖積平野にあり、鴨部川の東側の堤防直下に位置している。主に弥生時代前期後半～中期初頭の遺跡であり、他に古代の遺構面がある。鴨部川の洪水砂が厚く堆積しており、弥生時代前期の遺構面は現地表面から1.5mほど下の標高7.5m前後で、鴨部川の河床より低くなっている。

遺跡の中心となるのは弥生時代前期である。遺構としては竪穴住居・土坑・溝などを検出したが、なかでも特筆されるのは集落を囲む環濠である。平成2年度の調査ではその一部を、平成3年度では全体を調査した。環濠の中からは夥しい量の土器・石器・木器が出土した。木器では鋤の製作工程を示す一連の資料が出土しており注目される。また環濠の外でも竪穴住居を数棟検出している。環濠に壊されている竪穴住居もあることから、弥生時代前期後半に集落が成立し、前期末段階に環濠を掘削して環濠集落として機能したことが伺える。遺物は土器・石器とも多量に出土した。時期的にも弥生時代前期末前後と時期幅も狭いことから、当該期の基準資料になるものと考えられる。また、量的には少ないが鴨部川のすぐ東の調査区で溝や自然河川から古代の遺物が出土している。なかでも自然河川から斎申が出土したことは注目される。

整理作業は平成2年度調査分を、平成7・8年度の2年間で実施することとなった。平成3年度調査分は平成9年度以降に続けて整理する予定である。本年度の整理は遺物の復元・実測・遺物観察表作成を中心に行なった。土器約2300点、石器約500点、木器35点を図化することが出来た。さらに木器については樹種鑑定・保存処理を併せて実施した。遺構・遺物のレイアウト、図版作成、遺物の写真撮影、原稿執筆も一部行なった。次年度に継続して行なう予定である。

(森)

作業内容 / 月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
注記・接合・復元	■											
遺物実測				■								
遺物写真撮影				■							■	
図版作成								■				
遺物観察表作成				■								

表2 鴨部・川田遺跡整理作業工程



図1 調査区割図

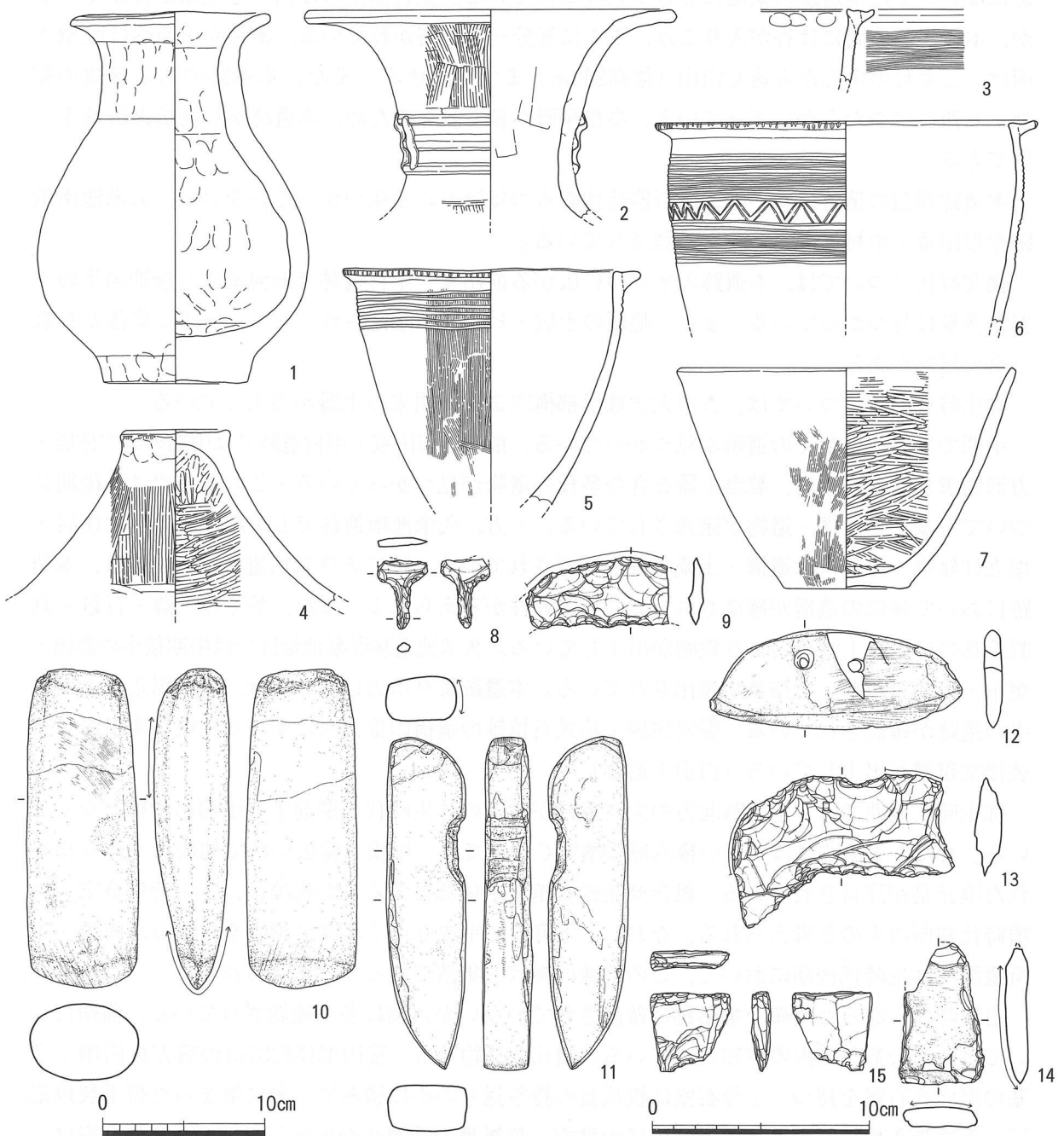


図2 出土遺物 1~7・10・11 S=1/4 1~7・9 D区 SH05 8・13 D区包含層 15 B区包含層
8・9・12~14 S=1/3 10~12 C区 SD01 (環濠) 14 C区 SH03

Ⅲ. 発掘業務の概要報告

1. 西浦谷遺跡

(1) 遺跡の立地と環境

西浦谷遺跡は、高松市・三木町境にほど近い丘陵上に位置し、三木町池戸1649-1他に所在する。周辺の地形を巨視的に見ると、本遺跡北東の立石山（標高272.5m）から南に低い丘陵が伸びているが、これが途中から西に方向を変えて芳岡山へと続く高まりとなる。本遺跡はこの高まりのなかの丘陵にある。ただ、詳細に見ると本遺跡の西側は谷が入りこんでいる。この谷を挟んだ西側の丘陵にはかつて、権八原古墳群が存在したが現在は香川医科大学が建設され面影はない。また本遺跡の東側にも谷が入りこんでいる。立石山からは西へも尾根が伸びているが、本遺跡との間には谷が入りこみ、ここに五分一池が築かれている。南東から南へは眺望が開け、三木町の中心から遠く白山（標高203m）まで見渡せる。また、本遺跡のある丘陵の裾部より西へはなだらかに下っていき、高松平野へ続く。そのため、本遺跡から高松市街地が一望できる。

本遺跡周辺の遺跡について、旧石器時代のものほとんど見つからないが、久米池南遺跡や前田東・中村遺跡で遺物が確認されている。

縄文時代については、本遺跡のすぐ西に広がる前田東・中村遺跡で旧河道より後期前半の土器が多量に見ついている。また、晩期の土坑・ピットが確認されており、周辺に集落が存在した可能性がある。

弥生時代前期については、香川大学農学部構内より前期末の土器が出土している。

中期では周辺で多くの遺跡が見ついている。前述の前田東・中村遺跡では中期の竪穴住居・方形周溝墓などの遺構、製塩土器を含む多種の遺物が見ついている。この遺跡では、後期についても多くの遺構・遺物が確認されている。一方、久米池南遺跡でも中期後半の竪穴住居・掘立柱建物・テラス状遺構・土壙墓等が確認されている。特にテラス状遺構については、本遺跡において類似の遺構が確認されており、関連性が考えられる。また、多くの土器・石鏃・鉄製工具のほか、土壙墓内より鉄剣が出土している。久米池遺跡群墓地地区では中期後半の壺棺・甕棺・箱式石棺墓・木棺墓が検出されている。本遺跡より南方においては、白山周辺に中期後半の遺跡が確認されている。竪穴住居・箱式石棺等の遺構の他、西に伸びる尾根筋南斜面で袈裟襷文銅鐸が出土している（白山1遺跡）。

弥生時代後期では、本遺跡北方の大空遺跡が県下の弥生時代後期前半の土器の指標となっている。また、本遺跡にほど近い権八原古墳群C地区では、尾根を幅広い溝で切断して作り出された墳丘墓が目されている。組合せ箱式石棺を主体部とするこの古墳は、弥生時代終末～古墳時代初頭のものと考えられる。なお、三木町内で平成6～7年度に調査を行なった鹿伏・中所遺跡は弥生時代後期において、この地域の拠点集落であったと考えられる。

古墳時代になると明確な集落跡は確認されていないが古墳は多く確認されている。前期については、高松茶臼山古墳が知られている。墳丘全長約75m・後円部径約37mの前方後円墳で2基の竪穴式石室を持つ。1号石室は板状石の持ち送りの小口積みで、朱に染まった碧玉製鍬形石・画文帯重列神獸鏡・各種玉類のほか鉄剣・鉄鏃等の鉄製品が出土している。2号石室は、

自然礫を用いており、鉄製品が出土している。この古墳に関連しては、他に6基の埋葬施設が確認されている。他にも、この古墳周辺には多くの古墳が存在している。また、池戸神社古墳群の1号墳は柄鏡式の前円後円墳で、前期末～中期初の可能性を持つ。

古墳時代中期では、権八原古墳群が知られている。16基の小円墳群でほとんどが周溝をもっており、5世紀後半のものと考えられている。

後期については、本遺跡北方に久本古墳・山下古墳・小山古墳の3基の、いずれも横穴式石室を持つ巨石墳である。特に久本古墳は県下で唯一、玄室奥壁に作り付けの石棚を備える特異な構造を持つ。この石棚の下からは、亀甲型陶棺が見つかり、さらに副葬品としてこれも県下で唯一、承台付銅鏡が出土している。小山古墳は現在消滅している。

なお、本遺跡の位置する丘陵上には池戸西浦古墳、五分一池古墳群と称される古墳の存在が従来から指摘されていたが、本遺跡の西浦谷1号墳と同一のものかどうかは不明である。(吉田)

(2) 調査の概要

西浦谷遺跡では道路のセンター杭を基準とし、4調査区(I～IV区)に分けて調査を実施した。本遺跡は丘陵上に弥生時代後期の集落と古墳時代後期の古墳(西浦谷1号墳)、土壇墓が検出された。

弥生時代

竪穴住居跡

S H02 I区、丘陵部の東斜面で検出された竪穴住居である。斜面のため削平を受けており、

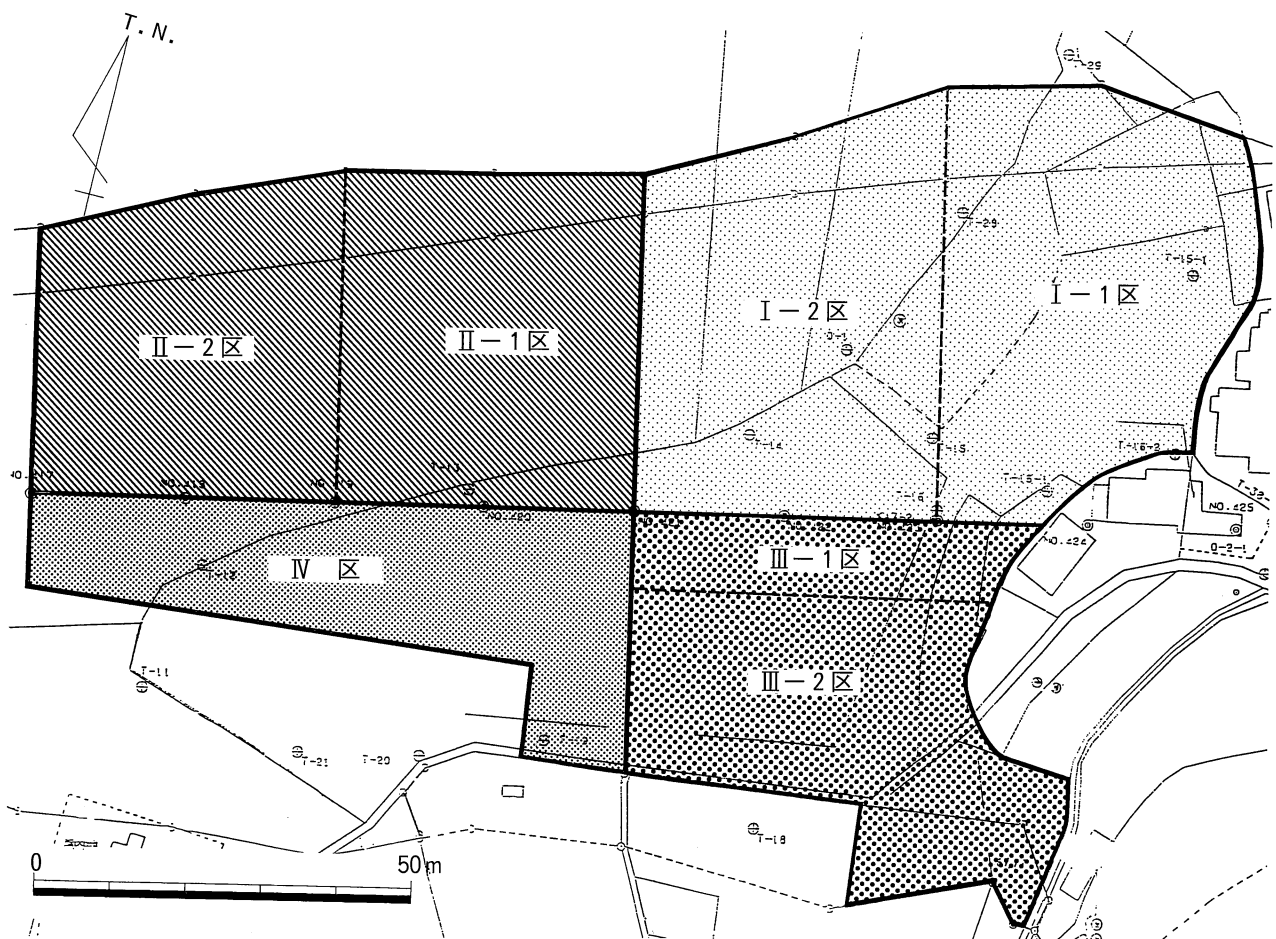
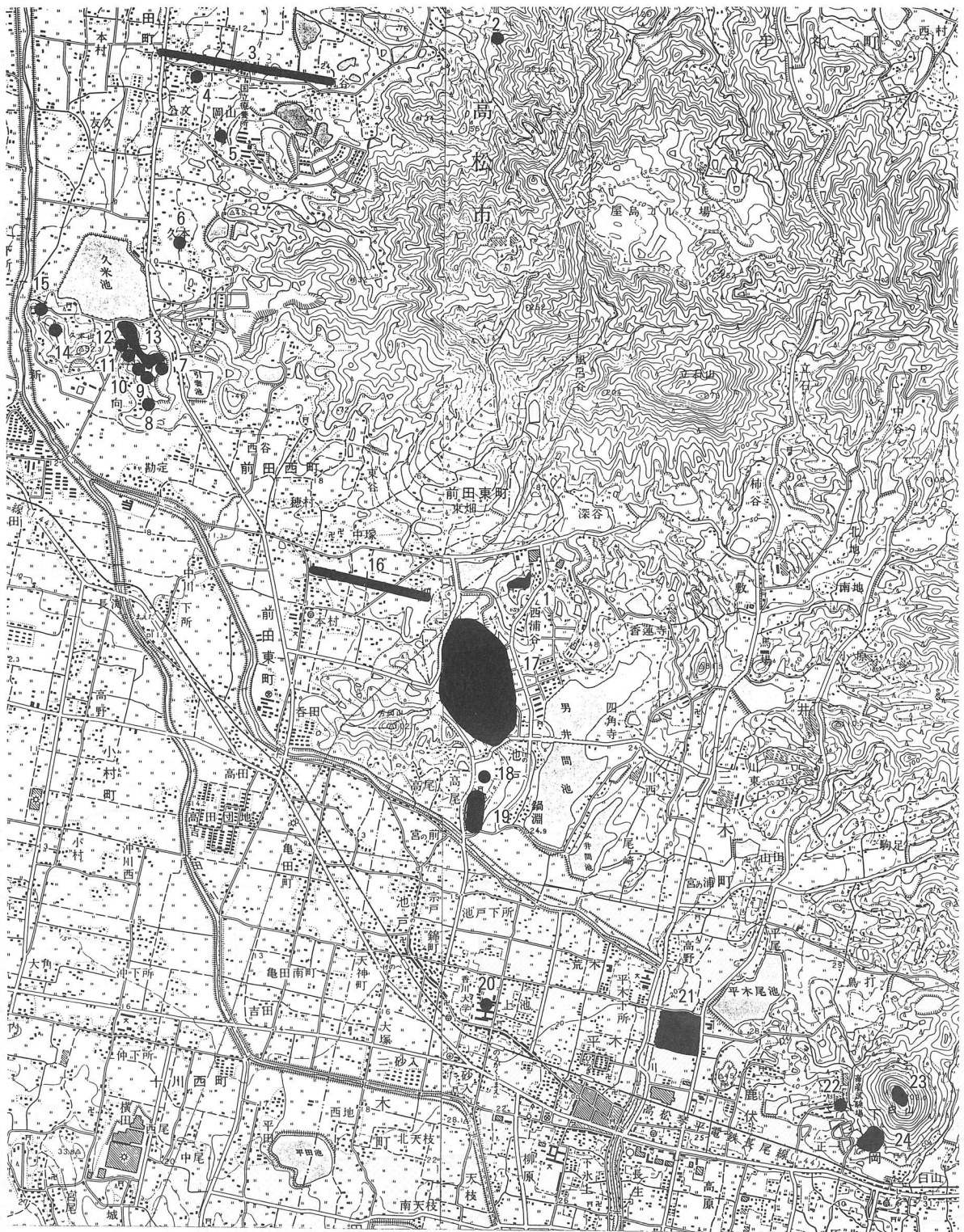


図3 調査区割図(1/1,000)



- | | | | |
|------------|--------------|--------------|----------|
| 1 西浦谷遺跡 | 8 高松茶臼山南古墳 | 15 諏訪神社古墳 | 22 白山1遺跡 |
| 2 大空遺跡 | 9 高松茶臼山古墳 | 16 前田東・中村遺跡 | 23 白山2遺跡 |
| 3 小山・南谷遺跡 | 10 高松茶臼山西古墳 | 17 権八原古墳群 | 24 白山3遺跡 |
| 4 小山古墳 | 11 西茶臼山1号墳 | 18 池戸八幡社裏古墳 | |
| 5 山下古墳 | 12 西茶臼山2号墳 | 19 池戸八幡社古墳群 | |
| 6 久本古墳 | 13 久米池南遺跡 | 20 香川大学農学部遺跡 | |
| 7 高松茶臼山東古墳 | 14 久米山遺跡群久米山 | 21 鹿伏・中所遺跡 | |

墓地地区

図4 周辺遺跡分布図 (1/35,000)

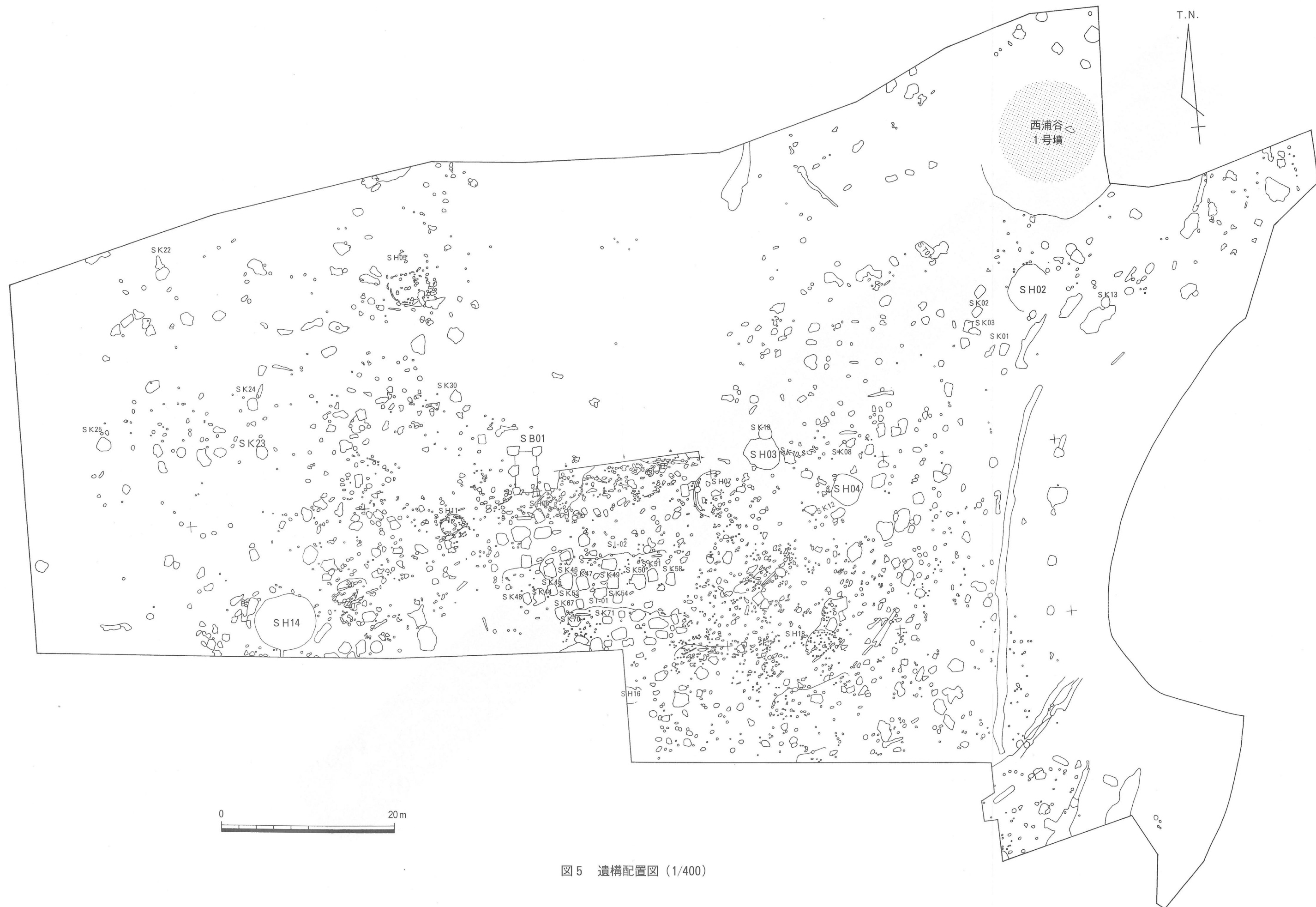


图5 遺構配置図 (1/400)

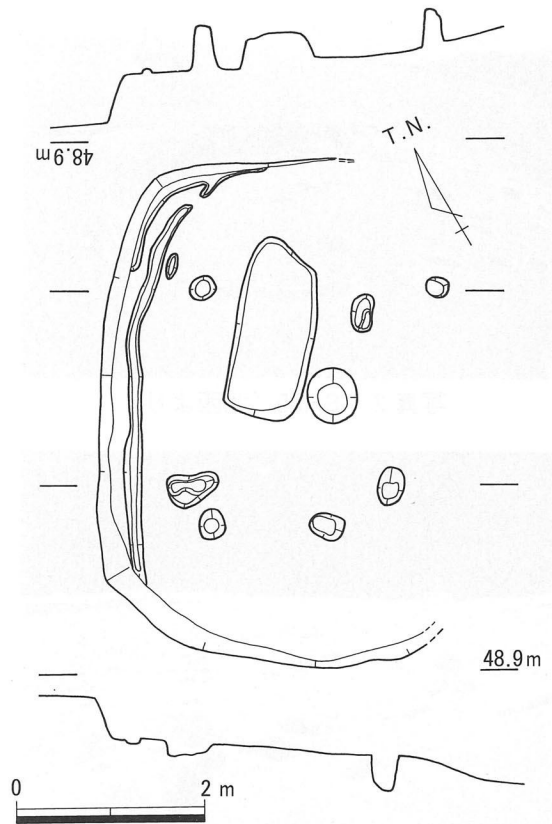


図6 SH02 平・断面図 (1/80)

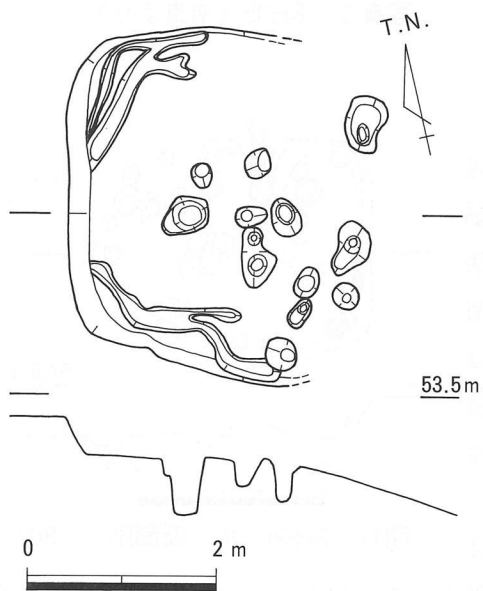


図8 SH04 平・断面図 (1/80)

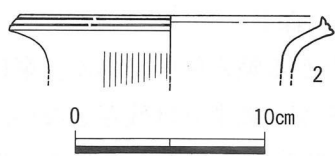


図9 SH04 出土遺物 (1/4)



写真1 SH02 (北より)

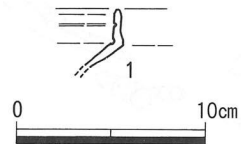


図7 SH02 出土遺物 (1/4)

東部では壁の立ち上りは検出できなかった。平面形は隅丸方形で、南北5.4m、東西3.6m以上、残存する最大の深さは0.4mを測る。西壁際には幅0.2mの壁溝を巡らす。遺構内からは8個の柱穴と土坑が検出された。土坑の平面形はややいびつな方形を呈し、深さ0.3~0.4mを測る。土坑はSH02に伴うものかどうかは不明である。SH02は火災を受けた焼失家屋で、炭化材が少量出土した。炭化材は西壁際で検出されたことから、壁材の一部の可能性も考えられる。出土遺物は弥生土器高杯の口縁部破片(1)など、小破片ばかりが少量出土した。出土土器から、弥生時代後期のものであると考えられる。(森下)

SH04 II区、丘陵の東斜面で検出された竪穴住居である。斜面のため、西半分は残存するが、北半分は残存しない。平面形は隅丸方形で、南北3.6m、東西3.2m以上を測る。壁際には壁溝が巡る。壁溝は一部二重に巡る部分があることから、住居の建て替えが行なわれたものと考えられる。床面からは柱穴が数個検出されたが、周囲にも柱穴が検出されていることから、SH04以外の柱穴も含まれると考えられる。出土遺物は弥生土器壺(2)など弥生土器片が少量出土した。出土土器から、弥生時代後期のものであると考えられる。

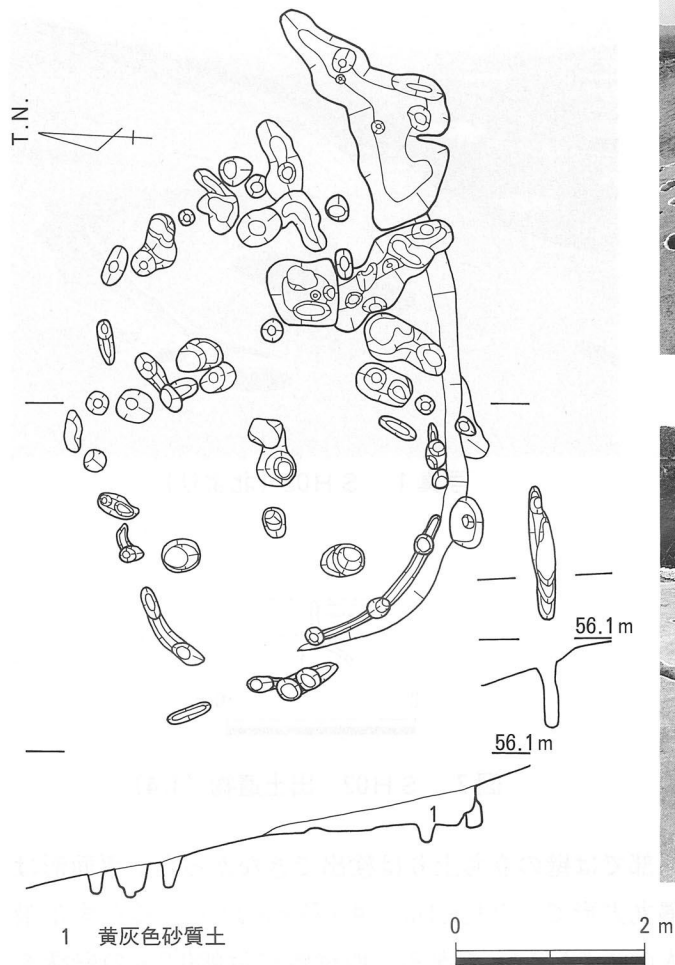


図10 SH05 平・断面図 (1/80)

SH05 II区, 北に伸びる尾根上で検出された竪穴住居である。斜面のため, 南半分が残存するが, 北半分の掘り込みは残存しない。南半分から推定すると平面形は隅丸方形で, 東西5.0m, 南北4.0m前後と推定される。南西部の壁際に幅0.1~0.2mの壁溝が巡る。壁溝の中には径0.1m, 深さ0.3m前後の小穴が等間隔で見られる。遺物は弥生土器小片が数点出土しただけで, 詳細な時期は不明である。(森下)

SH06 IV区北端, 丘陵のほぼ頂部で検出された竪穴住居である。南東部は斜面のため削平されているが, 壁際を巡る小穴から, 平面形はほぼ方形を呈し, 2.5m×2.8mの規模を測るものと推定される。床面から柱穴は多数検出されたが, 周囲にも柱穴が検出されていることから, SH06以外の柱穴も含まれていると考えられる。また, 北東部の壁際には土坑が検出されたが, SH06が掘られる以前のものであろう。遺物は弥生土器小片が2点出土しただけである。詳細な時期は不明である。(森下)

SH07 調査区のほぼ中央部, I・II・III・IV区すべてにまたがる竪穴住居である。東に伸びる尾根上に位置する。竪穴住居の掘り込みは西半分は残存するが, 東半分は残存しない。西半分から推定すると, 平面形は隅丸方形で, 規模は一辺4.8mを測るものと考えられる。西壁際には壁溝が巡る。床面には多数の柱穴が検出されているが, SH07の周囲からも多数の柱穴が



写真2 SH05 (北西より)

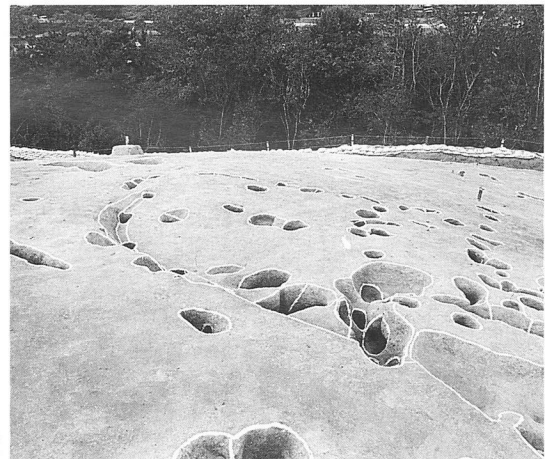


写真3 SH05 (南東より)

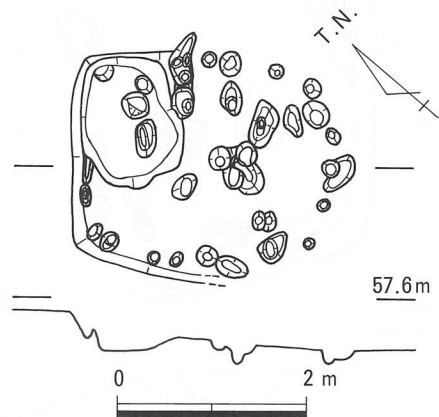


図11 SH06 平・断面図 (1/80)

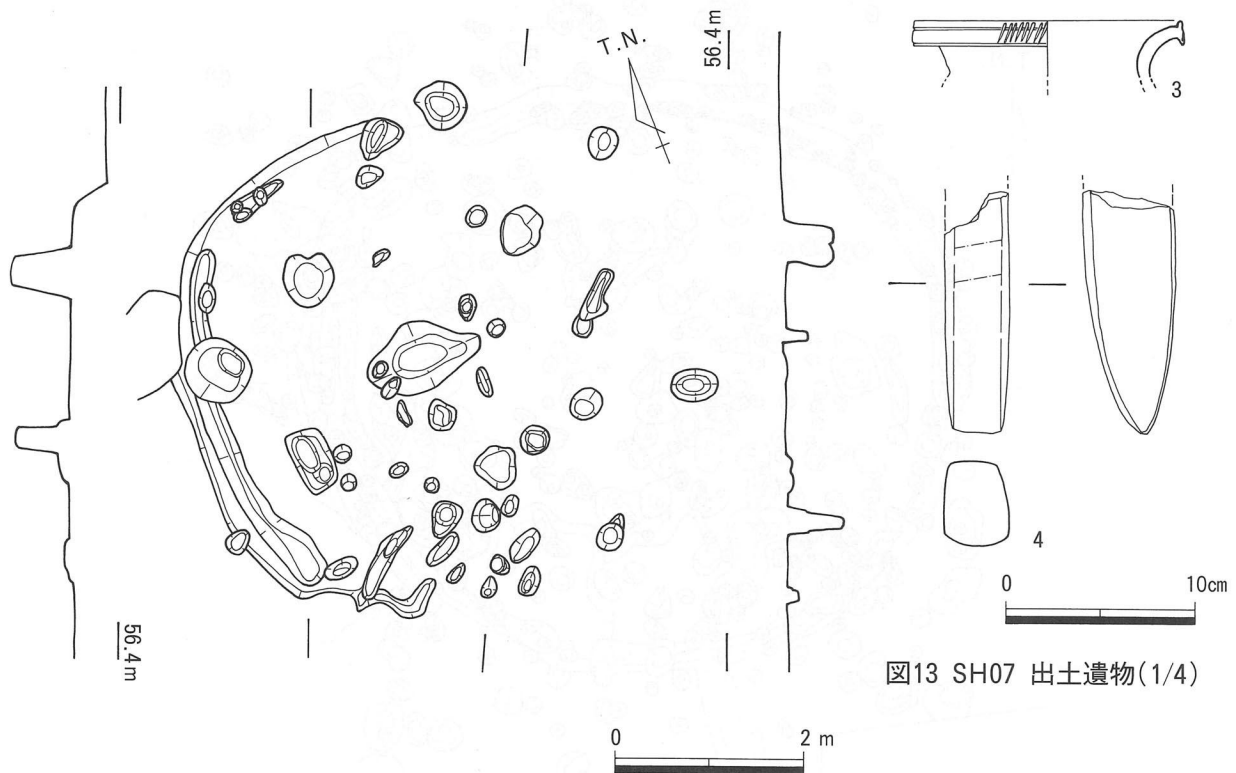


図13 SH07 出土遺物(1/4)

図12 SH07 平・断面図 (1/80)



写真4 SH07 (西より)

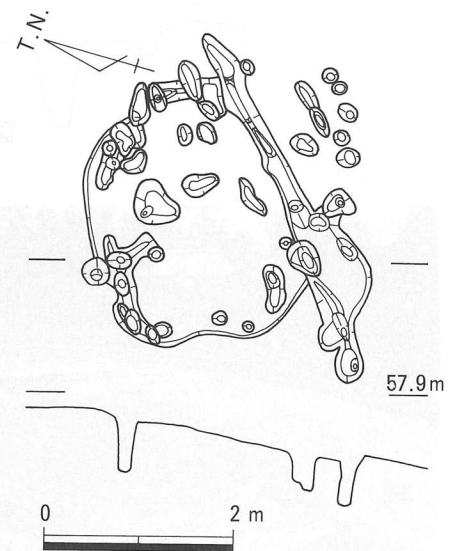


図14 SH11 平・断面図 (1/80)

確認されていることから、SH07以外の柱穴も含まれていると考えられる。出土遺物は弥生土器壺の口縁部破片(3)、柱状片刃石斧(4)など少量の遺物が出土した。出土遺物は弥生時代後期前半の様相を呈する。(森下)

SH11 IV区北端で検出された竪穴住居である。南斜面で検出されたため南部は削平を受けているが、壁際を巡る小穴の存在から、平面形はほぼ円形を呈し、径2.6~2.8mを測るものと考えられる。床面から柱穴は多数検出されたが、周囲にも柱穴が検出されていることから、SH11以外の柱穴も含まれていると考えられる。出土遺物はみられなかった。(森下)

SH14 IV区、南に伸びる尾根上の緩斜面で検出された竪穴住居である。平面形は円形で、本遺跡の中では最大の竪穴住居で、径6.1~6.8m、深さは0.1~0.6mを測る。竪穴住居の南部には

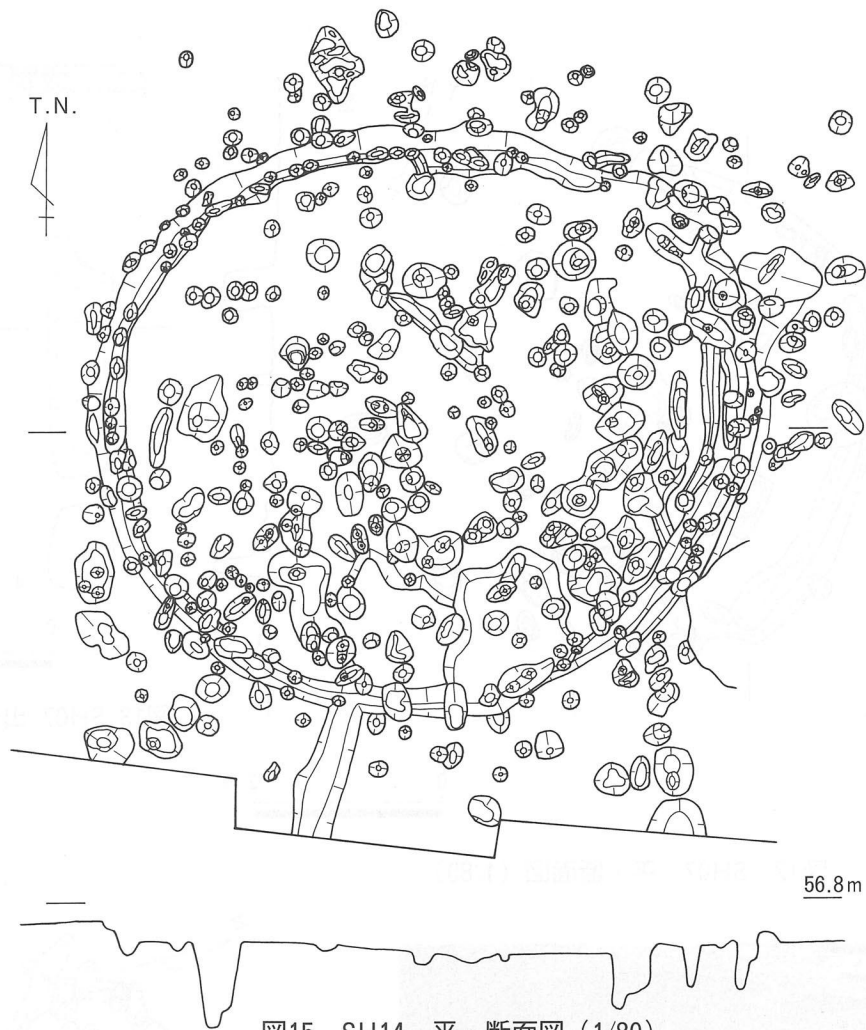


図15 SH14 平・断面図 (1/80)

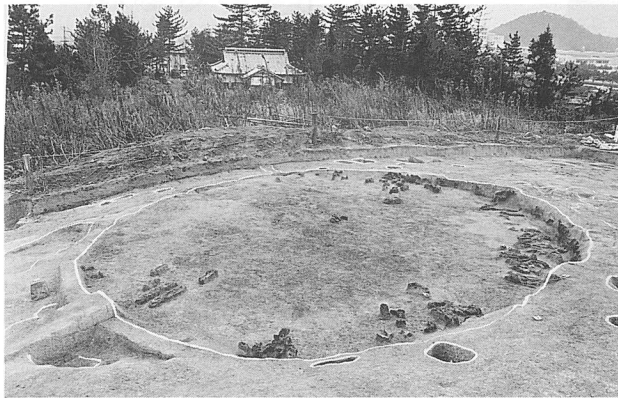


写真5 SH14 炭化材検出状況 (北東より)



写真6 SH14 焼土・炭化材検出状況 (北より)

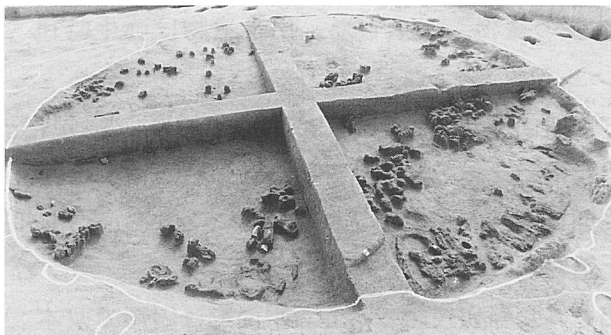


写真7 SH14焼土・炭化材検出状況 (北より)



写真8 SH14完掘状況 (北東より)

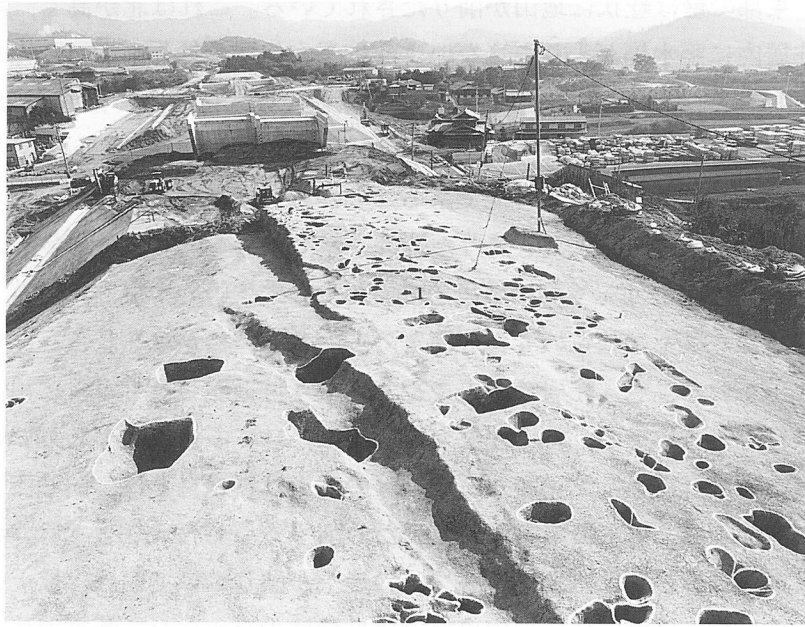
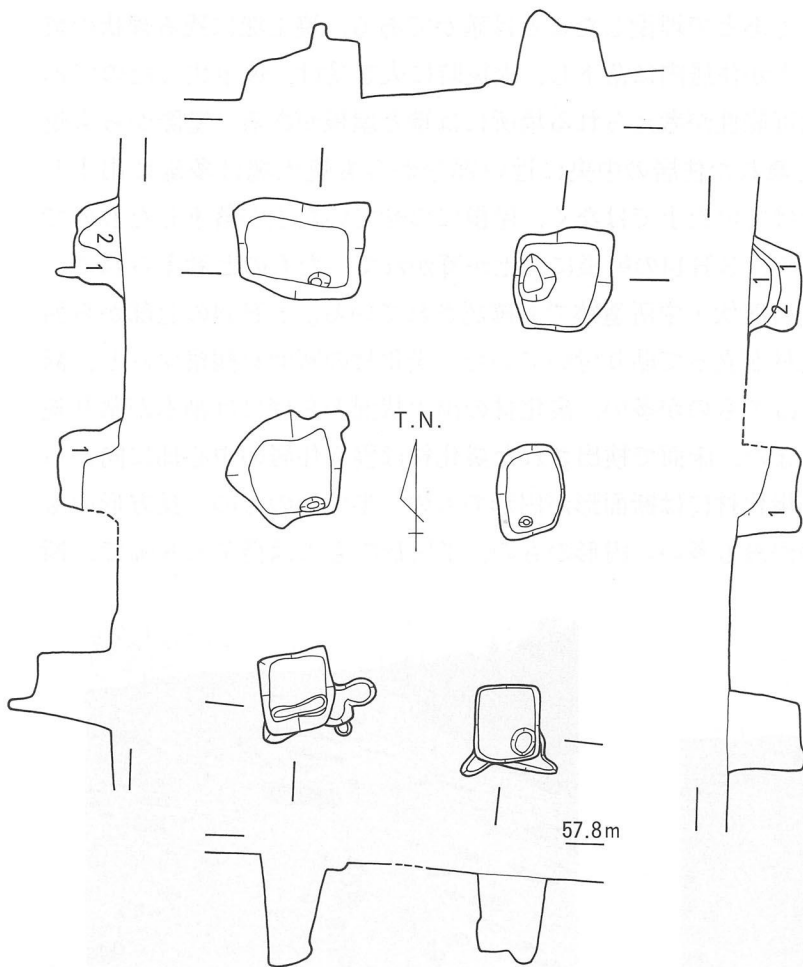


写真9 SB01付近 (西より)



- 1. 黄灰色砂質土
- 2. 暗灰黄色小礫混じり砂質土

図16 SB01 平・断面図 (1/80)

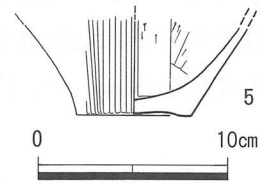


図17 SB01 出土遺物 (1/4)



排水溝をもつ。東部の壁は畦状に地山が削りだされている。これは北が高く、南が低い斜面に立地する竪穴住居内に雨水等が入りこまないように竪穴住居の外部を掘ったためのものである。排水溝は幅0.4m、深さ0.2mを測る。排水溝の東側、竪穴住居内の南端には東西1.0m、南北1.0mの範囲で床面が0.1mほど高くなっている場所がみられる。雨水等の侵入を考えると南部以外に出入り口をあけることは不可能であることから、南端の高まりは出入り口の通路ではないかと考えられる。S H14は火災を受けた焼失家屋で、焼土・炭化材が多量に出土した。焼土は壁際から埋土下部にかけて多量に堆積していた。竪穴住居の中央部には焼土の堆積はほとんどみられなかった。焼土は軟質のものと硬質のものの2種類がみられる。硬質の焼土は径10cm以下の塊となっており、竪穴住居の中央やや北西寄り付近から最も多量に出土した。炭化材は竪穴住居壁際付近から出土し、特に北部から西部にかけて多量に残存していた。なお、焼土は炭化材の下層にも少量堆積していたが、大部分の焼土は炭化材とほぼ同じ深さか、炭化材の上層で検出された。また、南東部の壁は斜面のため削平を受けており、壁の深さは0.1mと残りが悪いが、南東部以外の壁には厚さ1～2cmの焼土が貼りついており、焼土をはずすと、炭化材が検出された。焼土は竪穴住居の中央部では堆積は少なかった。軟質の焼土はそのままの形で取り上げて観察することは不可能であったが、固い焼土塊は取り上げて、観察すると線状の痕跡がみられるものが数十個あった。大部分の焼土は炭化材と同レベルかそれより上で検出されていることから炭化材よりもあとで埋没したことは確かである。焼土塊に残る線状の痕跡からも、何かの上ののせていた土が住居内に落下し、火災時に火を受け、焼土化したのであろう。竪穴住居で土をのせていた可能性が考えられる場所には壁と屋根がある。壁際からも焼土は堆積したが、壁際から2.5mも離れた住居の中央に近い部分からも焼土塊は多量に出土していることなどから、壁に貼り付けていた土ではなく、屋根にのせていた土が落下したものであろうと考えられる。このことから、S H14の屋根には土が葺かれていたものと考えられる。土葺き屋根は香川県内では三木町の鹿伏・中所遺跡でも確認されている。S H14の北部から西部の壁には密接した状態で、炭化材が立って貼り付いていた。炭化材の断面を観察すると、断面半月形の割木が多く、径5～8cmのものが多い。炭化材の出土状況から壁には割木が貼り巡らされていたものと推定される。また、床面で検出された炭化材は竪穴住居の中心部に向かって放射状に倒れた状態であった。炭化材には断面形が円形のもの、半円形のもの、長方形のもの3種類があるが、円形のもの、半円形のは径7～8cmで、断



写真10 SI01・02付近（南東より）



写真11 SI02付近（東より）

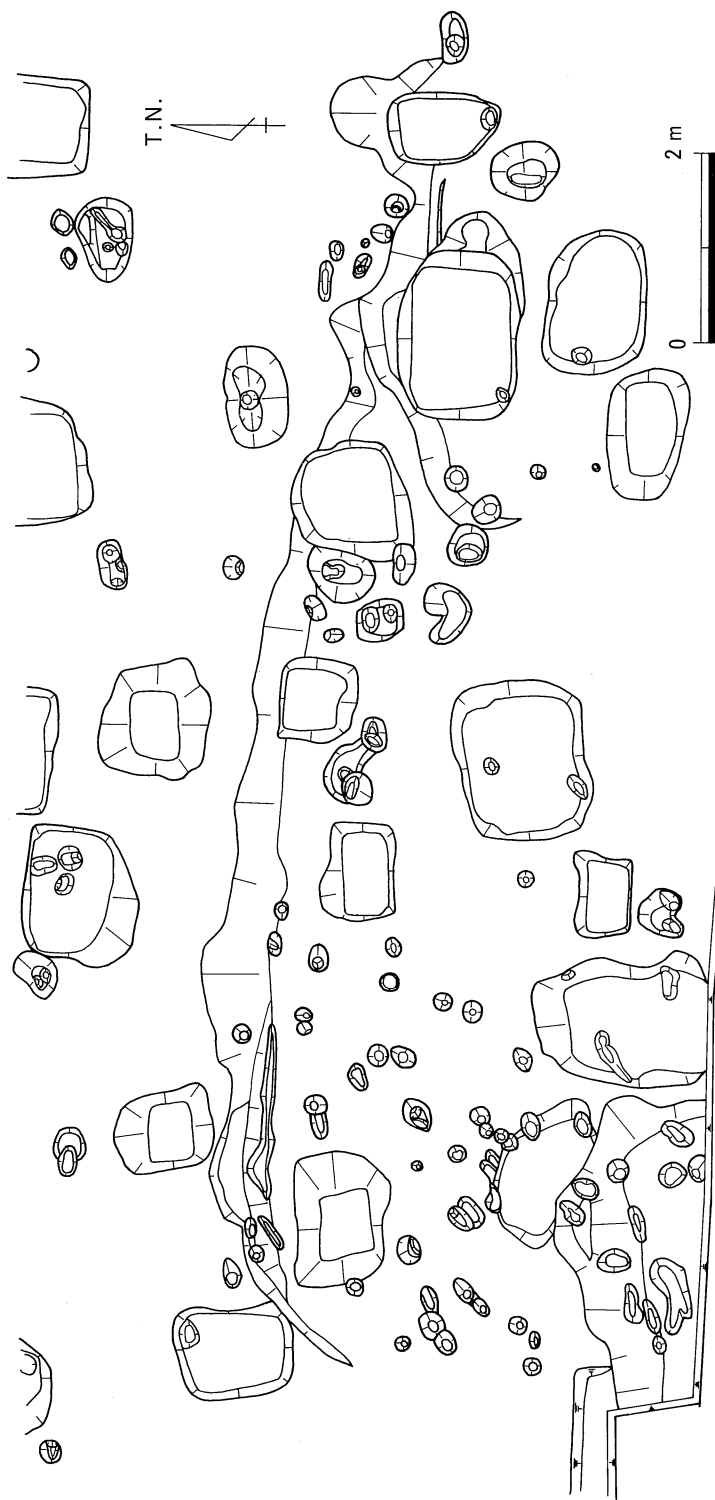


図18 SI01・02 平・断面図 (1/80)

を測る。柱穴の平面形はほぼ方形で、一辺0.7~1.2mを測る。柱穴は二段掘りになっており、底面には小穴がある。小穴の径は0.2~0.5m、深さ0.1~0.3m、遺構検出面からの深さは0.7~1.1mを測る。小穴は柱を据え付けるために掘られたものであることから、柱の直径は小穴の大きさから考えると0.2~0.5mであったものと考えられる。柱穴の深さは本遺跡の中で最も深いことから、かなり頑丈な構造の建物があったものと考えられる。遺物は柱穴から弥生土器壺・甕の口縁部破片など少量の遺物が出土した。弥生時代後期のものであろう。(森下)

面長方形の板状のものは幅8~15cmを測る。炭化材の長さは0.1~0.5mを測るが、本来の長さはこれ以上あったものと考えられる。炭化材が倒れた方向から、屋根に架けられた垂木であると考えられる。また、床面からは柱穴が多数検出されたが、周囲からも多数の柱穴が検出されていることから、SH14以外の柱穴も含まれているものと考えられる。壁際には壁溝が検出され、壁溝の中からは小穴が多数検出された。これは壁に貼り巡らされていた割木を設置するために掘られたものであろう。なお、炭化材は壁溝内からは検出されなかったが、これは壁溝内の木は火災を受けておらず、燃えていないので、炭化材として遺存しなかったものと考えられる。また、壁溝内の土層の堆積を観察すると土層の最上部には焼土・炭化物を含むが、下部にはみられないので、火災時には壁溝は埋まっていたものと考えられる。したがって、壁溝は壁に割木を設置するために掘られたもので、割木設置後、埋め戻されたものと推定される。竪穴住居内からの出土遺物は少なく、弥生土器片、サヌカイト製の石鏃、サヌカイト片が少量出土した。出土土器から弥生時代後期のものと考えられる。

掘立柱建物

SB01 II区の南東部、丘陵の頂部で検出された掘立柱建物である。1間(2.1m)×2間(4.2m)の建物で、棟方向はほぼ南北方向(N-2°-E)

段状遺構

S I 01 III区東部，丘陵の南斜面で検出された段状遺構である。丘陵の斜面に平行に幅1.5～2.0m，長さ13mに及ぶ平坦面がみられる。北側からの段の深さは0.5mを測る。S I 01の西部には北壁沿いに幅0.1m前後の溝が巡り，柱穴が多数検出されていることから，竪穴住居があったものと考えられる。また，東部においても数個の柱穴と土坑が検出されているが，壁溝がみられないことから，この付近には竪穴住居は存在しなかったものと考えられる。おそらく，通路や作業場所などの確保のため竪穴住居跡の横に平坦面を造成したのであろう。(森下)

土坑

S K 01 I区，丘陵部の東斜面，S H 02の南側で検出された。平面形は方形で，1.6m×1.4m，深さ0.5mを測る。土坑の底面には隅と中央に6個の小穴がみられる。小穴の深さは0.1mである。遺物は弥生土器の口縁部破片(6)が出土した。弥生時代後期のものであろう。(森下)

S K 02 I区，丘陵部の東斜面，S H 02の西側で検出された。平面形は隅丸方形で，1.5m×1.1m，深さ0.4mを測る。土坑の底面には北隅に小穴がみられる。小穴の深さは0.2mである。遺物は出土しなかった。(森下)

S K 03 I区，丘陵部の東斜面，S H 02の南西側で検出された。平面形はいびつな方形で，1.5m×1.2m，深さ0.4mを測る。土坑の底面には隅に4個の小穴がみられる。小穴の深さは0.1～0.4mである。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(森下)

S K 08 I区，丘陵部の東斜面で検出された土坑である。平面形はいびつな長円形で，1.3m×1.0m，深さ1.0mを測る。土坑の底面中央には小穴がみられる。小穴の深さは0.3mである。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(森下)

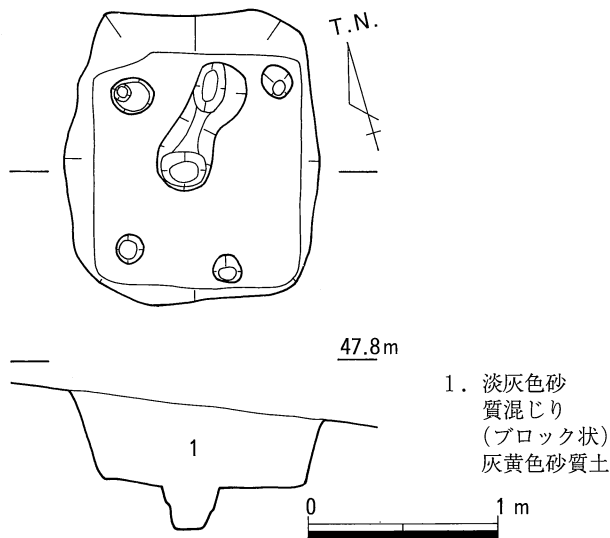


図19 SK01 平・断面図 (1/40)

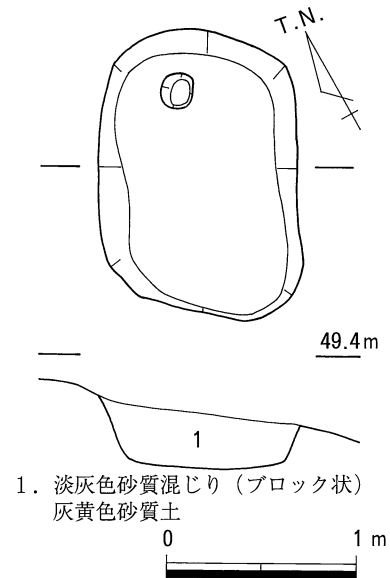


図21 SK02 平・断面図 (1/40)

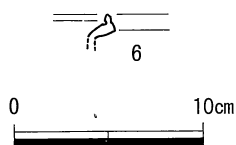
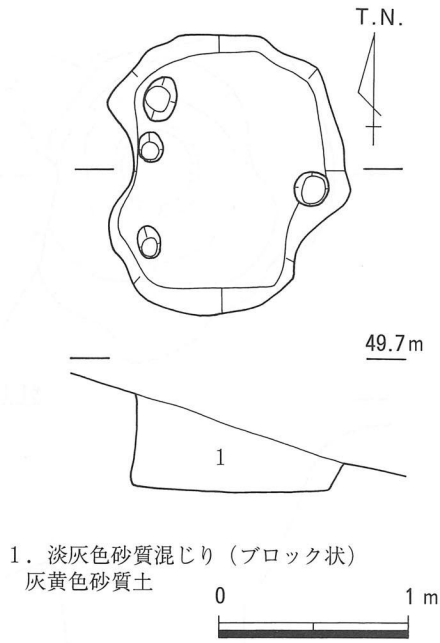
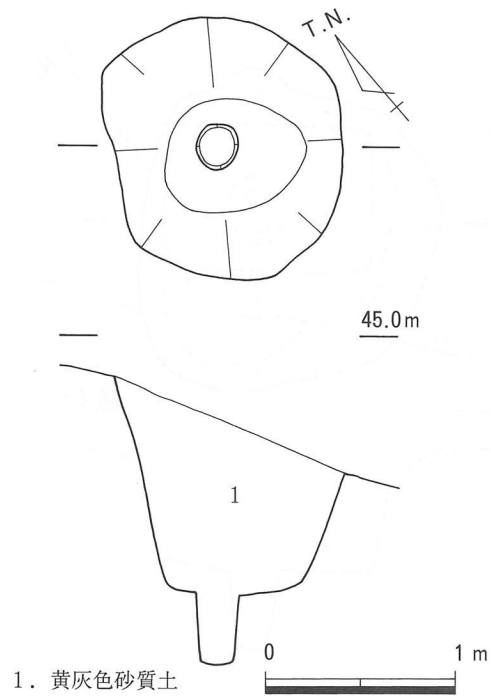


図20 SK01 出土遺物 (1/4)



1. 淡灰色砂質混じり (ブロック状)
灰黄色砂質土

図22 SK03 平・断面図 (1/40)



1. 黄灰色砂質土

図23 SK13 平・断面図 (1/40)

S K 10 I区, 丘陵部の東斜面で検出された土坑である。平面形は南に張り出しをもつびつな方形で, 1.3m×1.2m, 深さ0.4mを測る。土坑の底面中央には小穴がみられる。小穴の深さは0.4mである。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(森下)

S K 12 I区, 丘陵部の東斜面で検出された土坑である。平面形はいびつな長方形を呈し, 1.7m×1.0mを測る。土坑の底面中央には小穴がみられる。小穴の深さは0.2mである。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(森下)

S K 13 I-1区南西寄り, 東斜面の中腹で検出された。平面形は南北1.4m・東西1.2mの長方形である。深さは, 斜面の高い側になる西肩で1.2m, 低い側の東肩で0.6mである。底部はほぼ水平で, 南北0.6m・東西0.7mの長方形で, 下部施設として径0.2m・深さ0.4mの円形の柱穴を1個持つ。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(吉田)

S K 22 II-2区の北端近く, 頂上尾根から北西方向に下る尾根上で検出した。平面形は上部

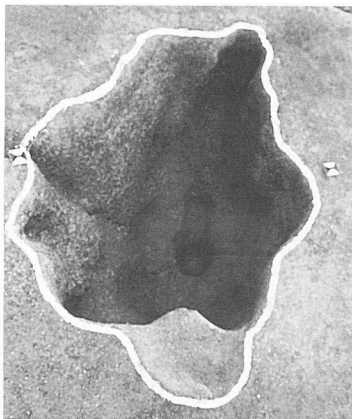


写真12 SK08 (南より)

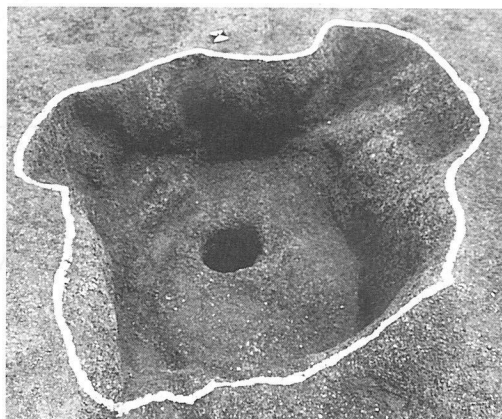


写真13 SK10 (西より)



写真14 SK12 (西より)

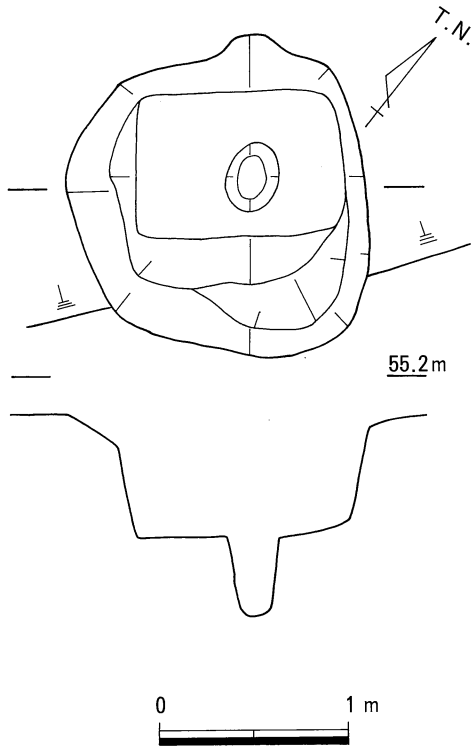


图24 SK19 平·断面图 (1/40)

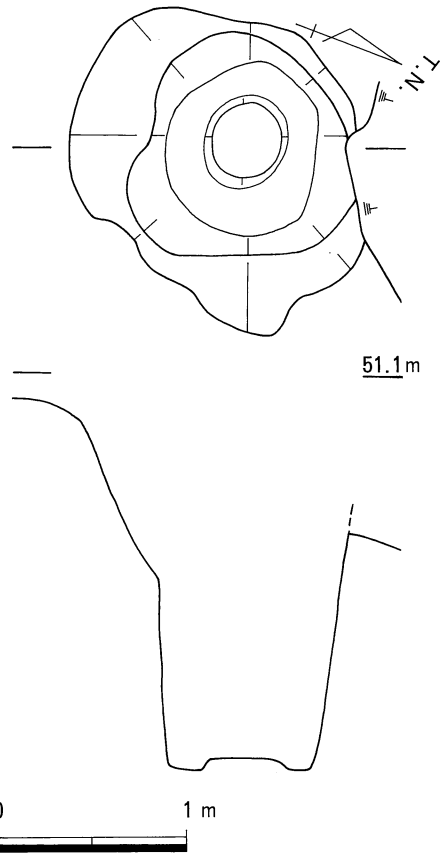


图25 SK22 平·断面图

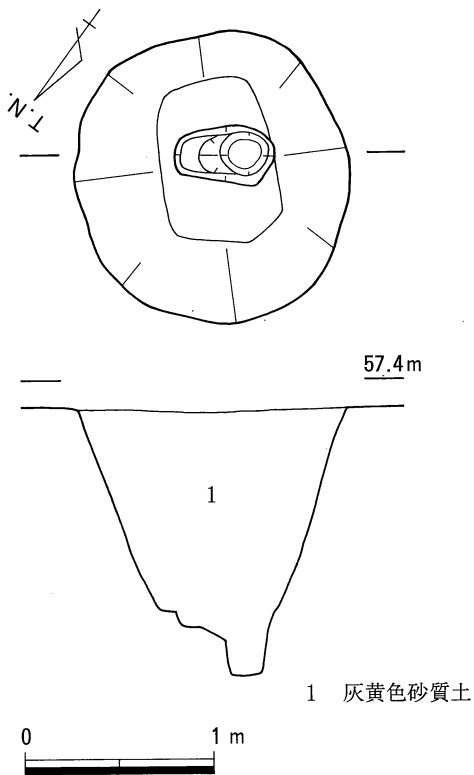


图26 SK23 平·断面图 (1/40)

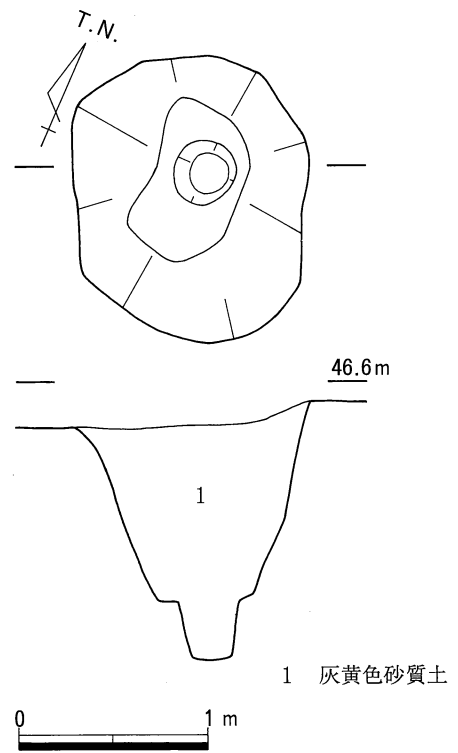


图27 SK24 平·断面图 (1/40)

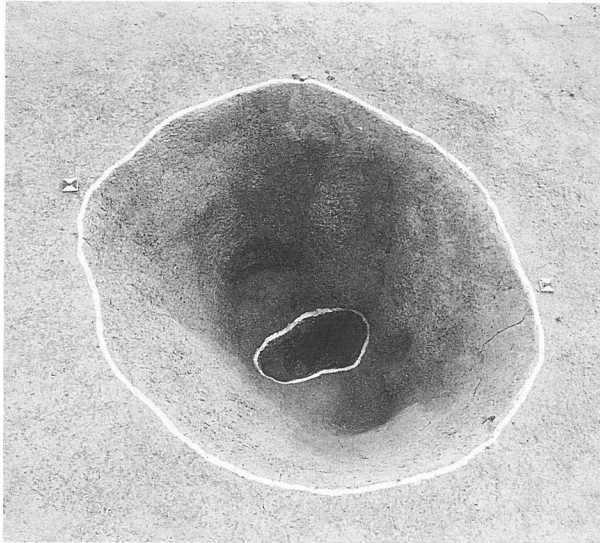


写真15 SK23 (北より)

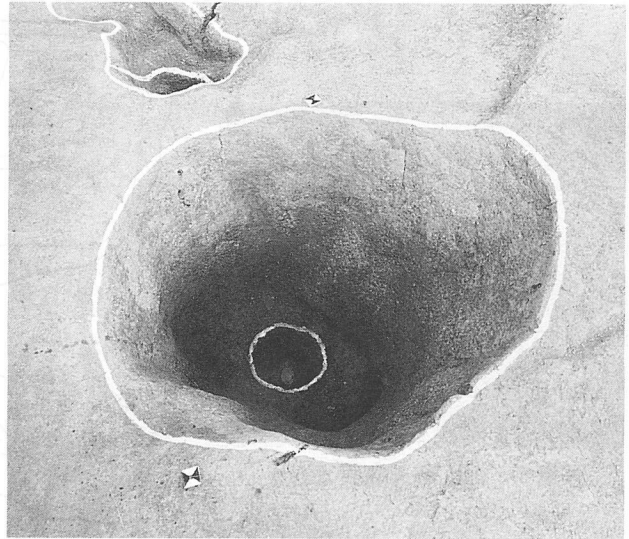


写真16 SK24 (西より)

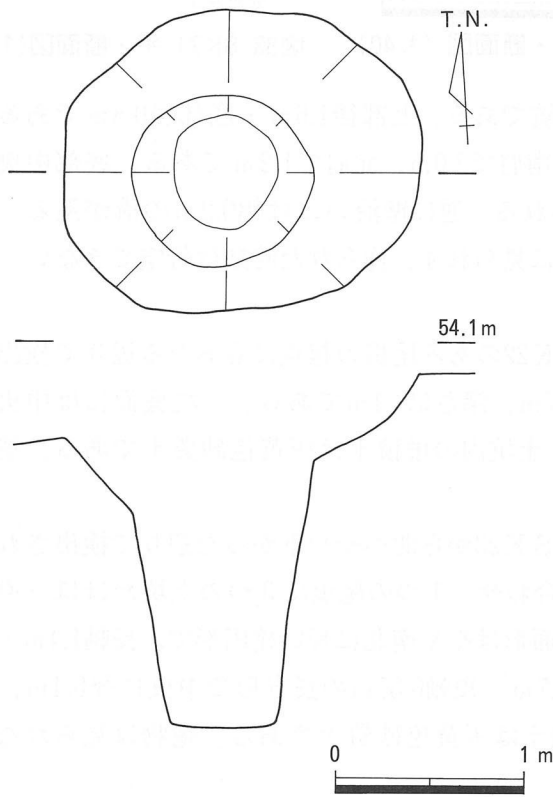
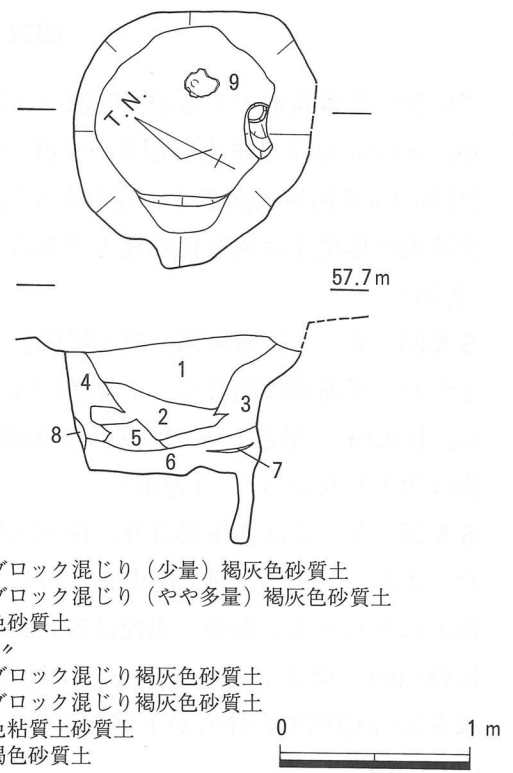


図28 SK25 平・断面図 (1/40)



1. 黒色ブロック混じり (少量) 褐灰色砂質土
2. 黒色ブロック混じり (やや多量) 褐灰色砂質土
3. 褐灰色砂質土
4. /
5. 黒色ブロック混じり 褐灰色砂質土
6. 黒色ブロック混じり 褐灰色砂質土
7. 褐灰色粘質土砂質土
8. 暗灰褐色砂質土

図29 SK30 平・断面図 (1/40)

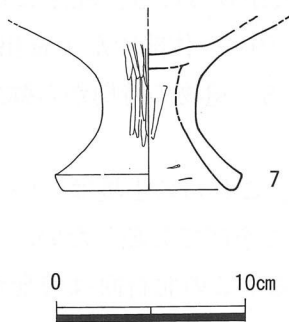


図30 SK50 出土遺物 (1/4)

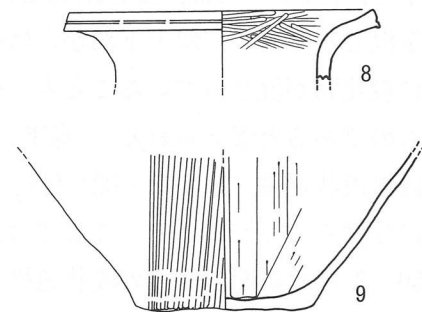
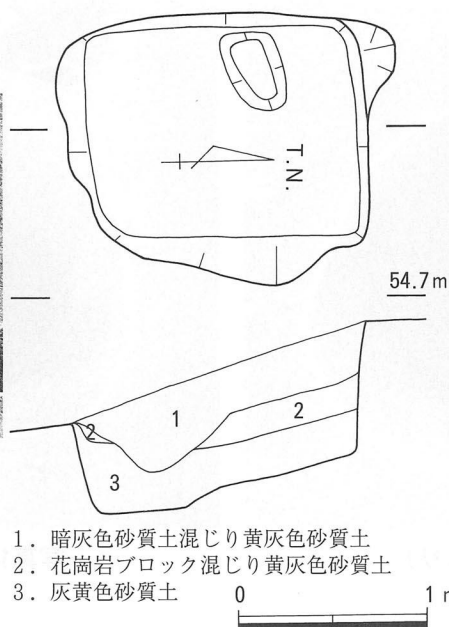


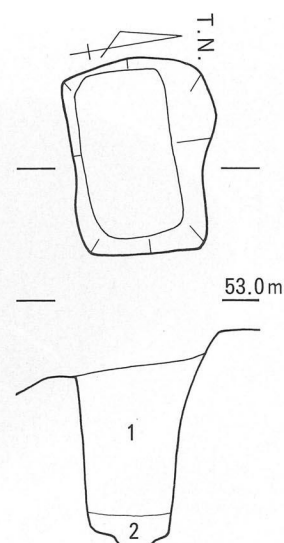
図31 SK30 出土遺物 (1/4)



写真17 SK50 (南東より)



1. 暗灰色砂質土混じり黄灰色砂質土
2. 花崗岩ブロック混じり黄灰色砂質土
3. 灰黄色砂質土



1. 小礫混じり灰黄色砂質土
2. 花崗岩ブロック混じり明灰色砂土

図32 SK50 平・断面図 (1/40) 図33 SK71 平・断面図(1/40)

でいびつな多角形であるが、底部はほぼ円形の土坑である。上部径1.6m・底部径0.8mであるが、下1.0mはほぼ垂直な掘り方を持つ。深さは、南肩で2.0m、北肩で1.2mである。底部中央は径0.4mの円形の高さ5cm程の盛り上がりが見られる。逆に壁沿いには幅0.2mの溝が巡る。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は特に見られず、作られた時期は特定できない。(吉田)

SK23 II-2区南東部、頂上尾根上であるがSK22のある尾根の起点にもあたる辺りで検出された。平面形は円形で、上部径1.5m・底部径0.7m、深さは1.1mである。土坑底面には中央に、径0.2m・深さ0.5mの柱穴が1個確認された。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は出土しなかった。(吉田)

SK24 II-2区南東部寄り、頂上尾根上にあるSK23から北へやや下がった辺りで検出された。また、SK22と同一尾根上にあり、SK23と合わせ、1つの尾根に3つの土坑がほぼ一直線上に存在する。形態・規模はSK23に近い。平面形はやや南北に長い楕円形で、長軸1.4m・短軸1.0m、深さは1.0mである。土坑底部は長軸0.7m・短軸0.35mの長方形で中央に径0.4m、深さ0.3mの円形の柱穴が1個ある。土坑内の堆積土は灰黄色砂質土である。遺物は見られない。(吉田)

SK30 II区の南東部、北に伸びる尾根の北東斜面で検出された土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、径1.2~1.4m、深さ0.7mを測る。底面の南部には小穴が見られる。埋土には炭化物が少量混じっており、埋土下部からは弥生土器壺(8)、底部片(9)や体部片が少量出土した。埋土に炭化物が混じっていることから貯蔵穴であると考えられる。遺物の時期から弥生時代後期のものであると考えられる。(森下)

IV区の段状遺構(SI01・02)付近で多くの土坑を検出した。これらの土坑は、いくつかの種類に分けることができる。ここでは、代表的なものを例として挙げて分類したい。

SK50 IV区北斜面の2つの段状遺構(SI01・02)の間にある。この北斜面は勾配が20°~30°と急である。この土坑の平面形は等高線に垂直な方向に長軸を持つ長方形であるが、この土坑を代表とする土坑群は基本的にこの形である。長軸1.6m・短軸1.2mで深さは北肩で0.7m、

南肩で0.5mで、ほぼ垂直に掘ってある。傾斜を利用し、高い側を深く掘り、低い側を浅く掘ることによって水平に近い底部を作り出している。底部には浅い落ち込みが1つある。土坑内の堆積土は3層に分かれるが、いずれも灰黄色砂質土が基本となっている。掘削中に底部よりやや上で炭化物が混じった薄い層が確認された。遺物としては弥生土器高杯(7)が出土した。弥生時代後期のものであろう。

S K 50を代表例とする土坑群には他に、S K 46・47・49・51・52がある。特徴としては、平面形態の他、断面形態、炭化物の含有が挙げられる。また、大きく分類すれば同じパターンに入るが、S K 43・44・45・53・67は、傾斜の低い側が地面のレベルになり段差がなくなっている。この点を除いては、S K 50のグループと共通する。(吉田)

S K 71 IV区南斜面、S I 01と重複して検出された。S K 71のほうが古い。平面形は、東西方向の長軸が1.0m、短軸0.7mの長方形である。深さは傾斜の高い側の北肩で1.0m、南肩で0.8mであり、四方ともほぼ垂直な壁を持つ。特徴の1つとして、平面プランのサイズに対して深さがある点が挙げられる。床面は水平で長軸0.9m・短軸0.7mの長方形である。土坑内の堆積土は2層に分かれ、上層は灰黄色砂質土に小礫が混じったものであるが、下層はこの付近のベースの土となっている花崗岩に明灰色粘土を混ぜたもので、非常に硬くしまっていた。この下層の堆積土もこのグループの特徴になっている。遺物は少量の弥生土器片のみで、詳しい時代の確定はできない。(吉田)

S K 71を代表例とするグループには他に、S K 54・70が挙げられる。以上の3種類のパターンの他、断面形態・堆積土・底部施設の有無等でさらにいくつかのグループがあると思われる。

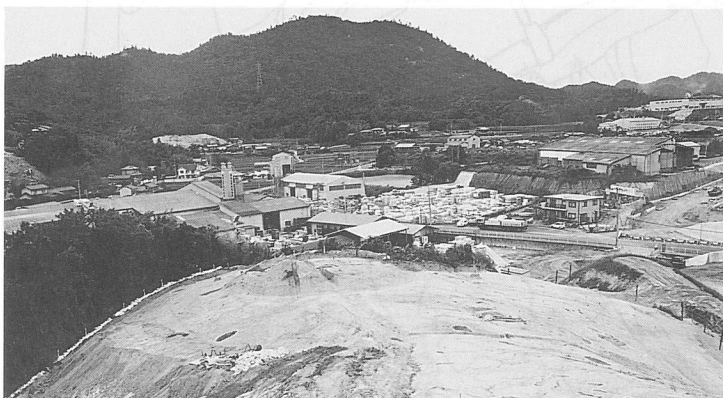


写真18 西浦谷1号墳遠景(南面より)

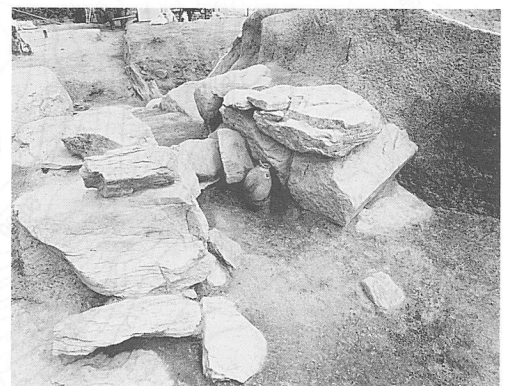


写真19 閉塞石付近提瓶出土状況(北西より)



写真20 閉塞石検出状況(西より)

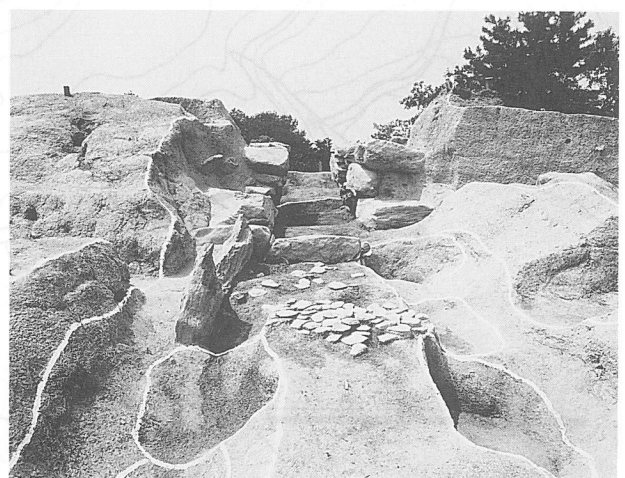


写真21 玄室検出状況(東より)

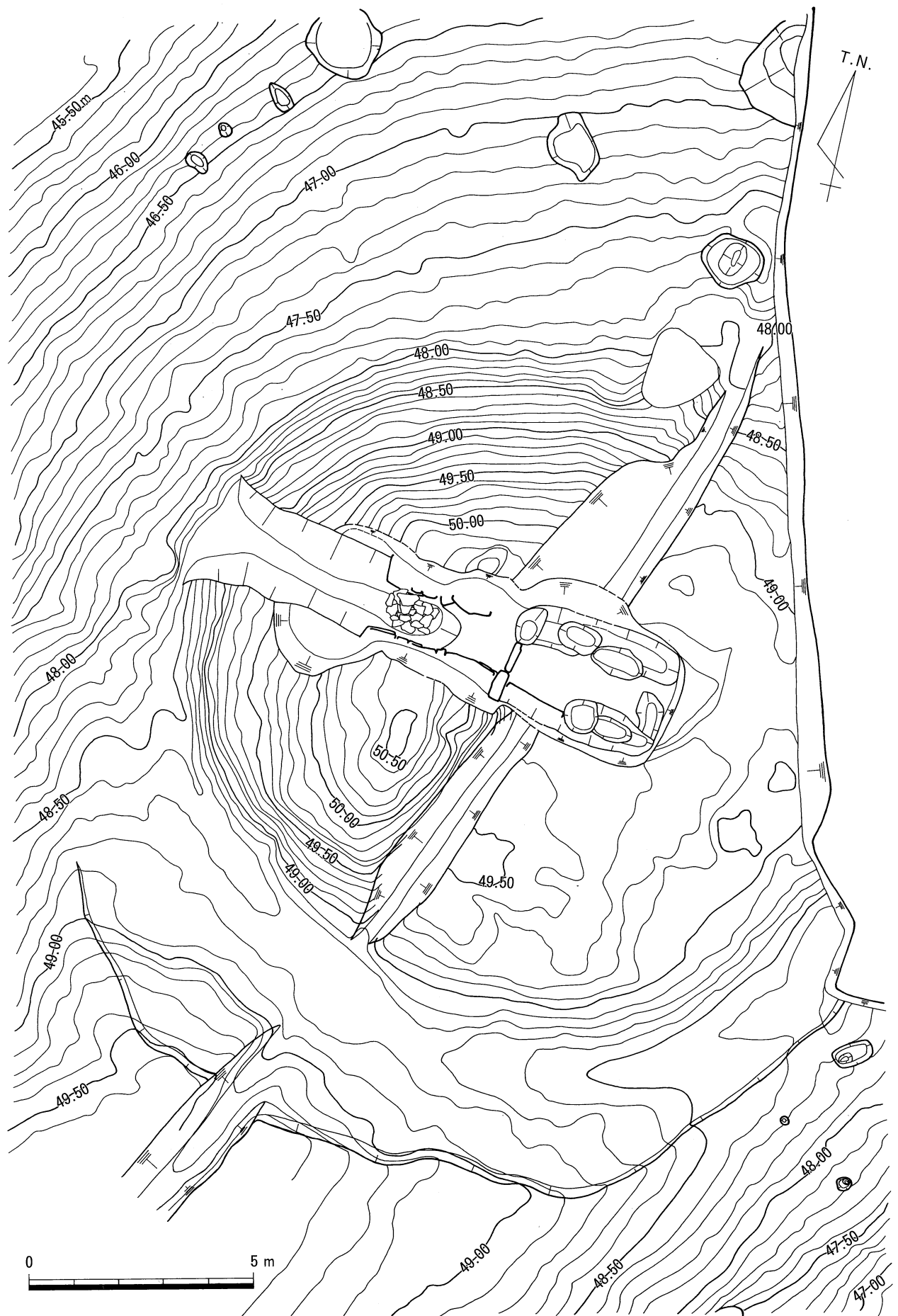


图34 西浦谷 1号墳 (1/120)

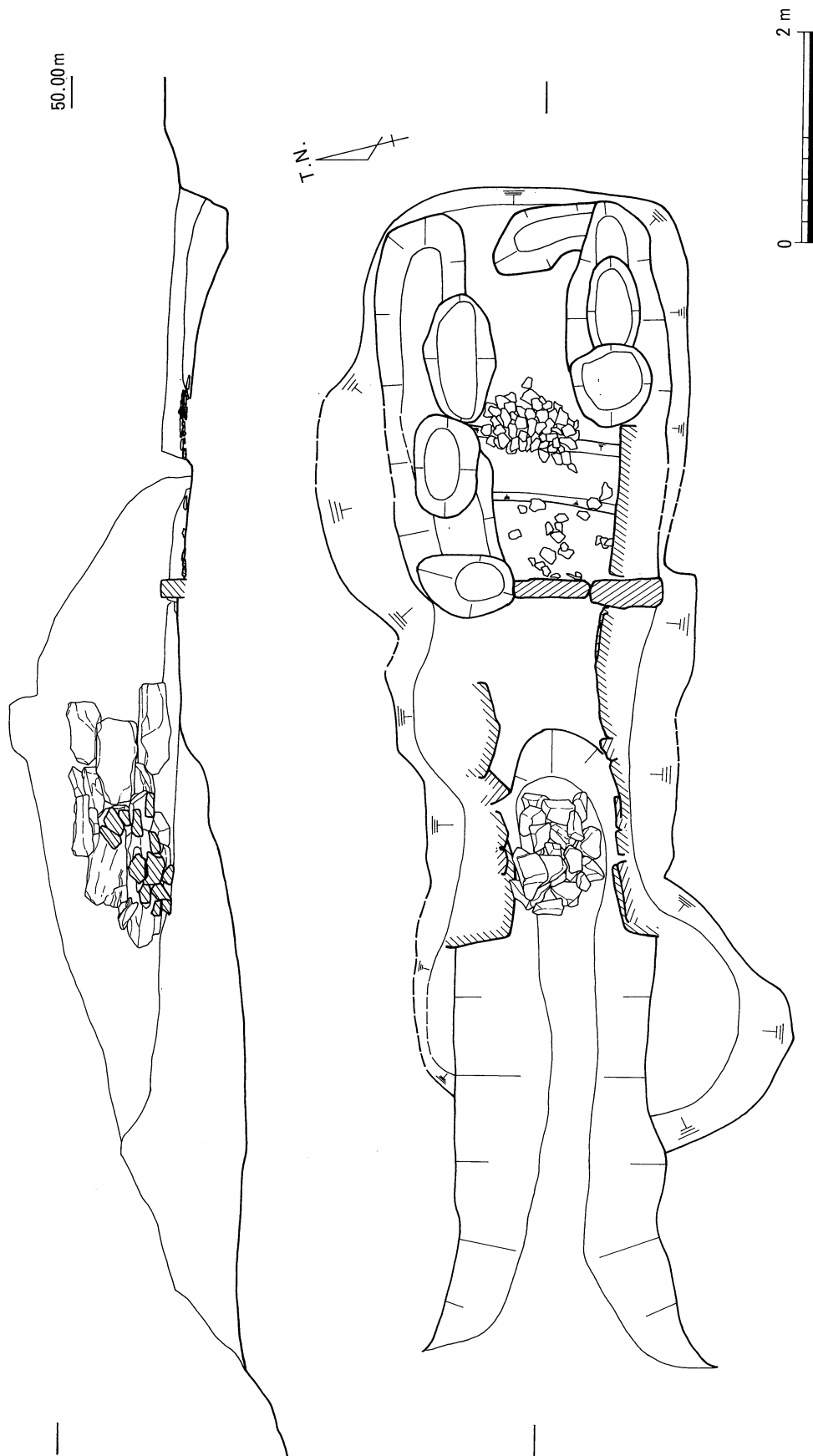


图35 西浦谷1号墳石室平·断面图(1/60)

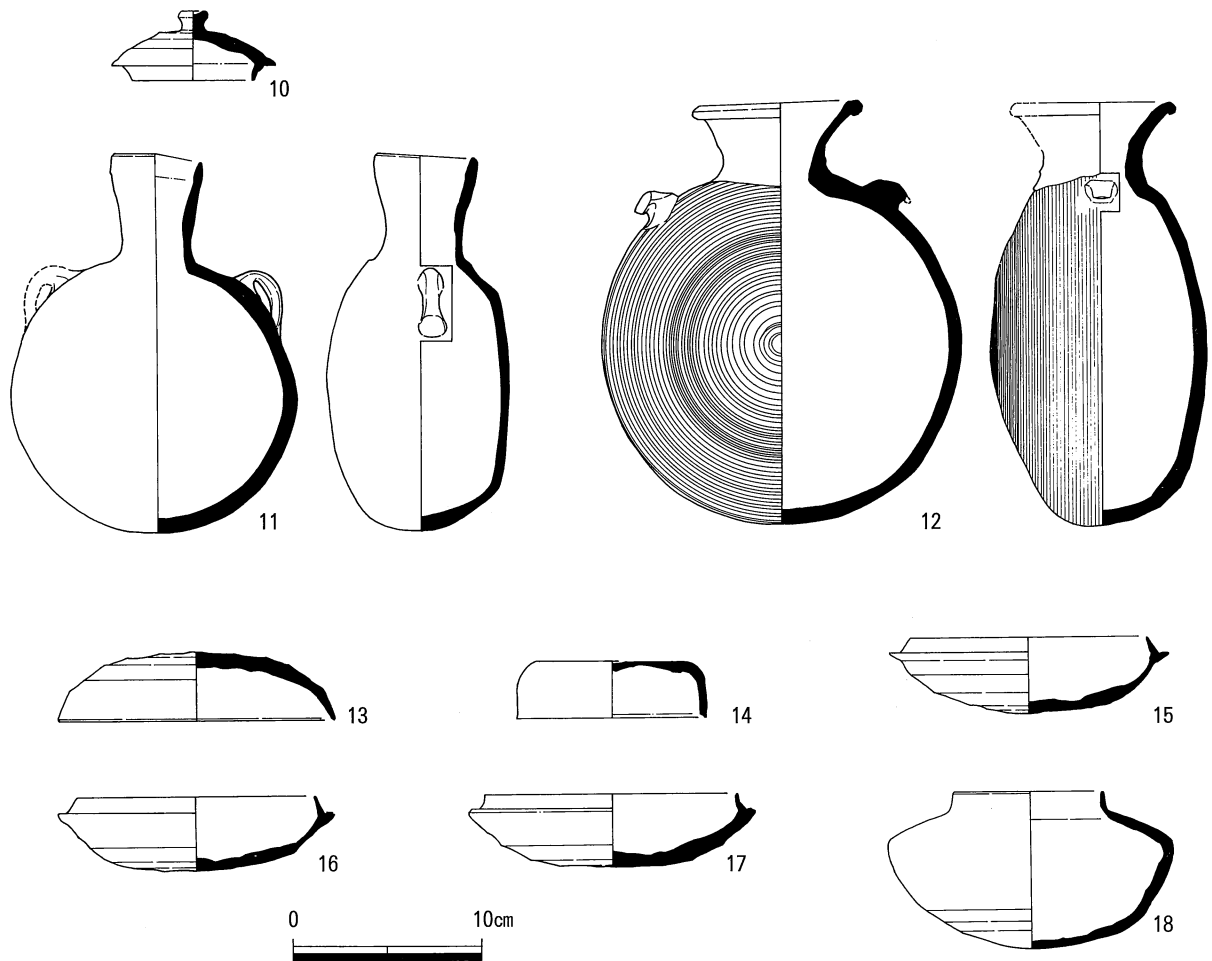


図36 西浦谷1号墳出土遺物(1/4)

が、ここでの分類は以上に留める。また、用途に関しても貯蔵穴・柱穴等が考えられる。(吉田)

古墳時代

西浦谷1号墳

I区の北端で検出された円墳である。南西から北東に伸びる尾根上に位置する。径16.3m、高さ2.2mを測る。古墳の南側、尾根に直交する方向に幅4.5m、最も深い場所で深さ0.9mの周溝をもつ。調査前、古墳は昭和初期に掘られた排水路によって、東西に分断されており、排水路から東側は果樹園として開墾されており、平坦地となっていた。そのため、排水路から東側は古墳の墳丘は削平されており、墳丘は西半分が残っているにすぎなかった。主体部は横穴式石室で、北西方向(N-80°-W)に開口している。主体部は後世の攪乱をかなりひどく受けており、玄室は奥壁、天井石は全く残っておらず、側壁が1石残っているに過ぎなかったが、石の抜き取り痕から、玄室の規模が推定できた。羨道部でも天井石も全く残っておらず、側壁の上部の石も持ち去られていた。羨道の先端には閉塞石が検出された。玄室には径0.1m、厚さ2~3cmの扁平な石が敷かれていた。また、羨道部の先端には築造時の墓道が検出された。石室は玄室の石が1石しか残っていないため、不明な点が多いが、両袖式石室である。玄門部の袖石は内側に張り出し、床面に敷居石を置く。石室の長さは玄室3.0m、羨道部3.2m、玄室

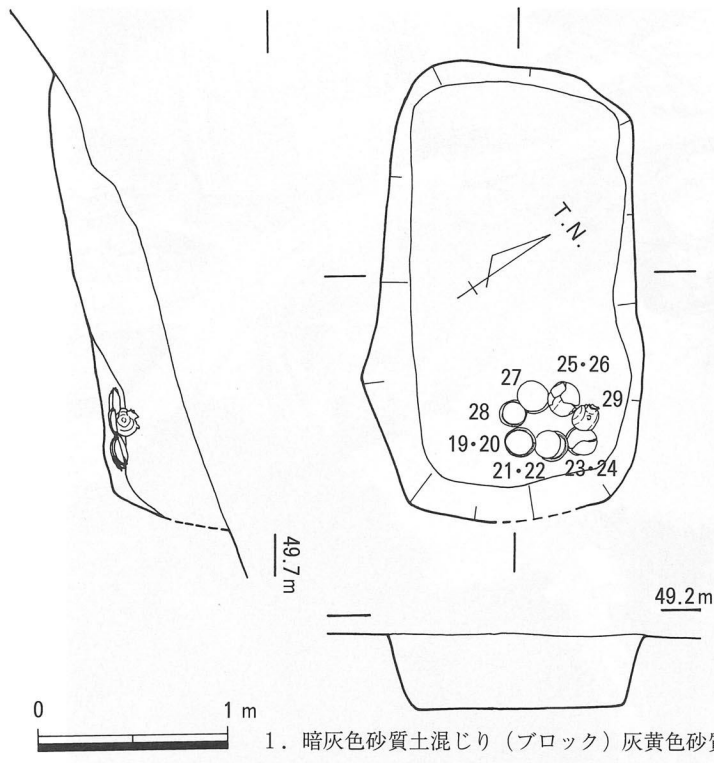


写真22 ST01 遺物出土状況

1. 暗灰色砂質土混じり（ブロック）灰黄色砂質土
 図37 ST01 平・断面図（1/40）

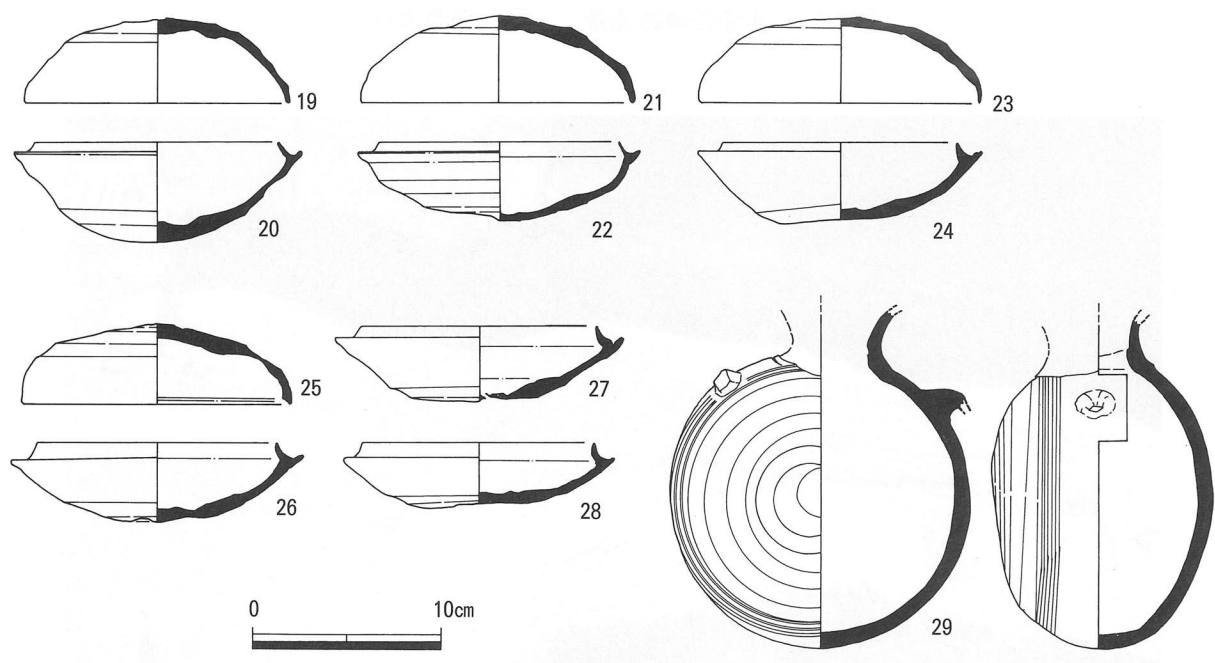


図38 ST01 出土遺物（1/4）

の幅は石が残っていないため不明であるが、石の抜き取り痕から1.3m前後と推定される。また、羨道部の幅は1.0mである。閉塞石の外側には須恵器提瓶(12)が出土した。羨道内からは須恵器蓋(10)・提瓶(11)、鉄釘1本が出土した。玄室からは遺物は出土しなかった。なお、墳丘西側からは須恵器の小破片が多量に出土した。これらは復元可能な遺物であった。石室内からはほとんど須恵器が出土しなかったことから、石室内に置かれていた須恵器が後世に持ち出され、一括して捨てられたものであろう。また、墳丘は黒色粘質土と黄色砂質土を交互に積んで築造



写真23 西浦谷遺跡遠景 I区（南西より）



写真24 西浦谷遺跡遠景 IV区（南より）

しており、固く締まっていた。出土須恵器の年代から、1号墳は6世紀後半に築造されたものと考えられる。(森下)

土壙墓

ST01 I-2区東寄りで検出した。頂上尾根から北東に向かって伸びた尾根があり、この尾根の北東端に1号墳がある。この尾根の北西の斜面にST01が見つかった。1号墳裾部からは約10mほど離れている。平面形は長軸2.4m・短軸1.3m~1.4mの長方形で、深さは南肩で0.6mであり、傾斜の低い側の北肩は0.1mほどである。堆積土は単一の暗灰色砂質土混じりの灰黄色砂質土である。この遺構を埋葬遺構(土壙墓)と考える理由としてその出土遺物が挙げられる。須恵器の提瓶が1個(29)、蓋杯5組(19~27)、杯身1個(28)が南寄りのほうから出土した。

注目すべきはその配置である。東端に提瓶を置き、そこから西へ2列に蓋杯を組み合わせて配置している。北西のものは杯身のみである。この蓋杯と杯身の配置はちょうど六文銭状である。こうした蓋杯など須恵器を用いた配置形態は近畿などで古墳にともなう埋葬儀礼として見られる。須恵器は6世紀後半のもので、1号墳とほぼ同時期のものである。

(3) まとめ

以上のように西浦谷遺跡では丘陵上の弥生時代後期前半の集落と古墳時代後期の土壙墓・古墳(西浦谷1号墳)が検出された。弥生時代の遺構は丘陵部の頂上の平坦地と南部の斜面で検出されており、主に丘陵部の南側に集落が営まれたことがうかがわれる。弥生時代の遺構は竪穴住居18棟以上、掘立柱建物4棟、段状遺構3、土坑109基などが検出された。竪穴住居跡は削平を受けたものが多く、柱穴の配置から竪穴住居を復元したものもある。また、南東斜面では段状遺構が3個検出されたが、同様の段状遺構は岡山県山陽町用木山遺跡などでも確認されている。竪穴住居は円形のものや隅丸方形のものがみられ、径または一辺3.0~5.0mのものが多い。だが、南斜面の西部で検出されたSH14は径6.0~6.8mとずば抜けて大きい。なお、前述のようにSH14は竪穴住居跡の構造がわかる良好な資料である。掘立柱建物は数棟検出された。その中でひとときわ目をひくのがSB01である。SB01の柱穴の掘り方は大きく、柱穴も深い。西浦谷遺跡の掘立柱建物の中でこのように大きな柱穴で構成された建物はSB01以外にはない。また、SB01は丘陵のほぼ中央部、尾根の頂部に位置しており、西浦谷遺跡のどの位置からも眺められる位置であったことから、集落内でも特別な用途の建物であったかもしれない。南斜面では遺構密度が高いが、北斜面には遺構が少ない。北斜面では土坑が4基検出された。これらの土坑は深さ1.2~1.9mと深く、竪穴住居から遠く離れた場所に検出されている。炭化物もほとんど出土しておらず、多量の植物の堆積も考えられないことから、落とし穴と考えられる。また、土坑の中でも南から東斜面で検出されたものは埋土下部に炭化物を含んでいるものが多い。底面には数個の浅い小穴を伴うものが多いなどの形態的特徴もみられる。これらの土坑は竪穴住居、段状遺構の近くで検出されていることから、貯蔵穴であると考えられる。

以上のように竪穴住居、掘立柱建物、貯蔵穴などが検出され、居住域であることが確認されたが、今のところ墓地と考えられる遺構は検出されていない。おそらく、付近にあると考えられるが居住域の中に墓地が混在することはなかったであろう。

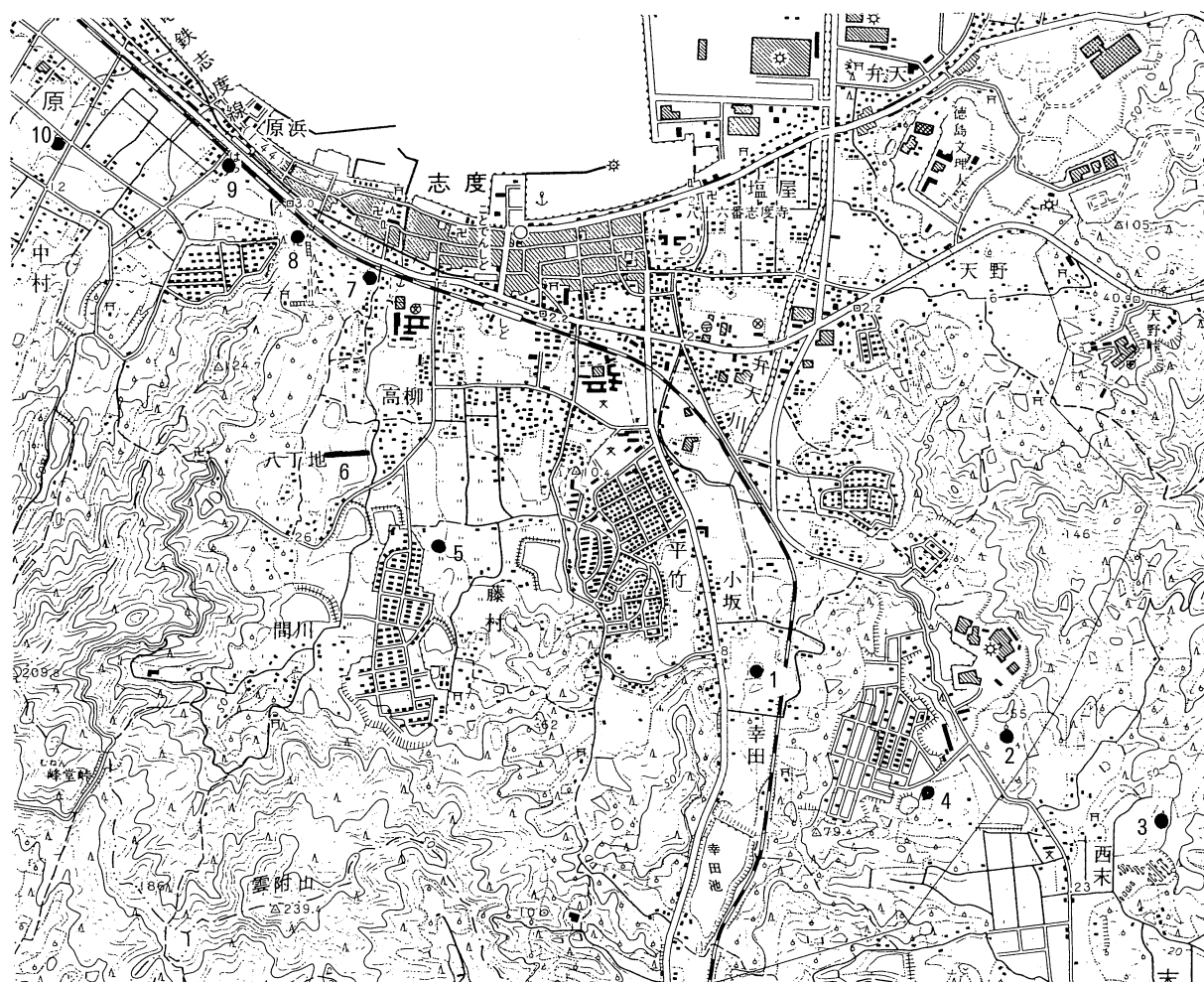
また、古墳時代に入ると西浦谷1号墳とST01がみられる。両者はほぼ同時期のものであることから、関連した遺構であると考えられる。(森下)

2. 幸田遺跡

(1) 立地と環境

幸田遺跡は、志度町の市街から長尾町へ向けて南へ1 kmほどの地点の志度町志度字幸田4789番地の1外に所在する。周辺は志度町の南に連なる低丘陵の雲附山と石鎚山の鞍部を分水嶺として、北に下る狭い谷である。この谷を下る水流は長い年月にわたって多くの土砂を運んだらしく、谷には砂が厚く堆積している。現在も小さな川が流れているが、上流は幸田池によって塞き止められ、川自体は護岸工事がなされているため、川の運ぶ土砂の量は低下していると思われる。土地は扇状地性の土質に適した果樹園として利用され、谷に沿ってJ R高徳線が走っている。

一方、末3号窯跡は志度町の市街から寒川町へ向けて南東へ2 kmほどの地点の志度町末1502番地外に所在する。五瀬山から南志度ニュータウンにのびる尾根の鞍部を南に越えたところの谷間に築かれており、谷は南に開ける。



- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 1. 幸田遺跡 | 5. 茶臼山古墳 | 8. 多和神社古墳 |
| 2. 末3号窯跡 | 6. 八丁地遺跡 | 9. 丸山古墳 |
| 3. 末1号窯跡 | 7. 越窓古墳 | 10. 中村窯跡 |
| 4. 末2号窯跡 | | |

図39 幸田遺跡・末3号窯跡の位置と周辺の遺跡分布

志度町は最近開発に伴う埋蔵文化財調査が多く行われているが、平地部での遺跡の確認は少ない。その中では志度町から牟礼町へかけての海岸線沿いで幾つか古墳が確認されている。すでにほとんどが消滅しており、築造時期が判明しているものはない。このような遺跡分布が疎らな状況は勿論調査例が少ないことにもよるだろうが、多くは平地が狭いという地形的な制約によって、農地の拡大・人口の増大・権力の発生といった発展をなしえなかったことに起因すると思われる。こういった視点に立つとき、同様に平地の狭い東隣の津田町で古墳時代前期から中期前半にかけて前方後円墳を含む首長墓の展開がみられることはそれ以外の理由を考えさせるものであり、幾つかの論考で取り上げられているように非常に興味深いものがある。

さて、末における窯跡の分布は今回調査した以外に2基確認されている。1号窯跡は3号窯跡の東南東600mの地点に存在する。1968年に調査され、谷筋の傾斜面で全長8.7m・幅2mの窯本体とその下方で物原が確認された。遺物から操業年代は2・3号窯跡より幅が広く、ほぼ7世紀代にわたると考えられている。2号窯跡は3号窯跡の西350mの地点に築かれていたらしい。開墾の結果消滅してしまっており、須恵器片や窯壁片が散布しているのみである。

ところで末窯跡群は行政上は志度町だが、志度町をめぐる山の反対側の斜面に築かれており、付近の道を下ってゆけば、南隣の長尾町にいたる。長尾町は遺跡分布が密な地域であり多くの古墳やさらに古代寺院が展開している。前述したような志度町における遺跡分布と地形から考えれば、末窯跡群を作った人々は南側の南海道沿いの平野部に存在した勢力と関係があったのではないだろうか。周辺で同時期の集落の調査があれば、このようなことを視野に入れた検討も必要になってくるだろう。

参考文献 松本敏三・岩橋孝「香川県古代窯業遺跡分布調査報告Ⅱ」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要Ⅱ』1985

(2) 調査の概要

調査地は谷底にあり、標高は7m程であり、付近の県道より約3m低い。調査面積は1,600m²で、便宜上①～③の3つの小区にわけて調査を行った。

調査の結果、遺跡の東半分には灰褐色の粘質土が堆積した落ち込みが検出された。この土の中には細片のため断定はできないが、12世紀頃と思われる須恵器が含まれていた。この落ち込みの下には、さらに幅約7mの落ち込みが存在した。この落ち込みは砂や粘質土が水平に堆積しており、ある時期の川であった可能性がある。深さは平均で1m、深いところでは1.2m以上あったが、地下水の湧出のため調査しえなかった。この最深

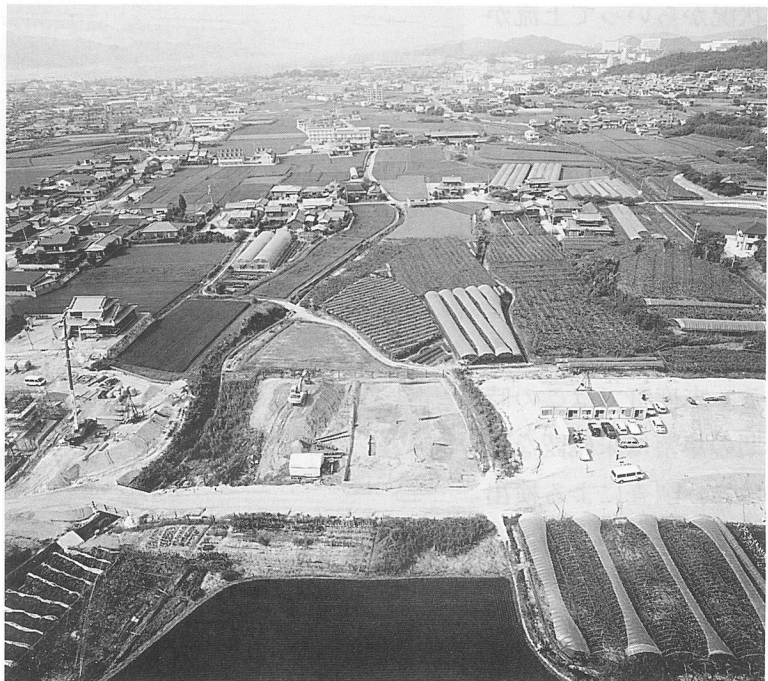


写真25 遺跡上空より海を望む

部では径60cmほどもある大木が幹のまま横たわっており、それを含む層は数十cmの厚さの砂で他にも木を多く含んでいる。また縄文時代後期の土器片もあった。おそらく何かの理由で上流から大水が一気に流れ下り、大量の砂や木をおし流してきたことが推測される。縄文土器は摩滅した細片であるため、この川の時期はそれ以後12世紀までの間と考えられる。

遺構面となっている土も遺跡内で一様でなく、砂や粘質土がみられる。この内淡褐色粘質土の中には少量の炭化物や縄文土器片が含まれていた。これらも状況からいって上流から土砂と一緒に運ばれたものと考えられる。

川や包含層に縄文土器が含まれていたことからこの谷の上流に縄文時代後期の遺跡が存在したことが推測できる。志度町ではこの時期の集落は未確認だけに、調査による検出を期待したい。(古野)

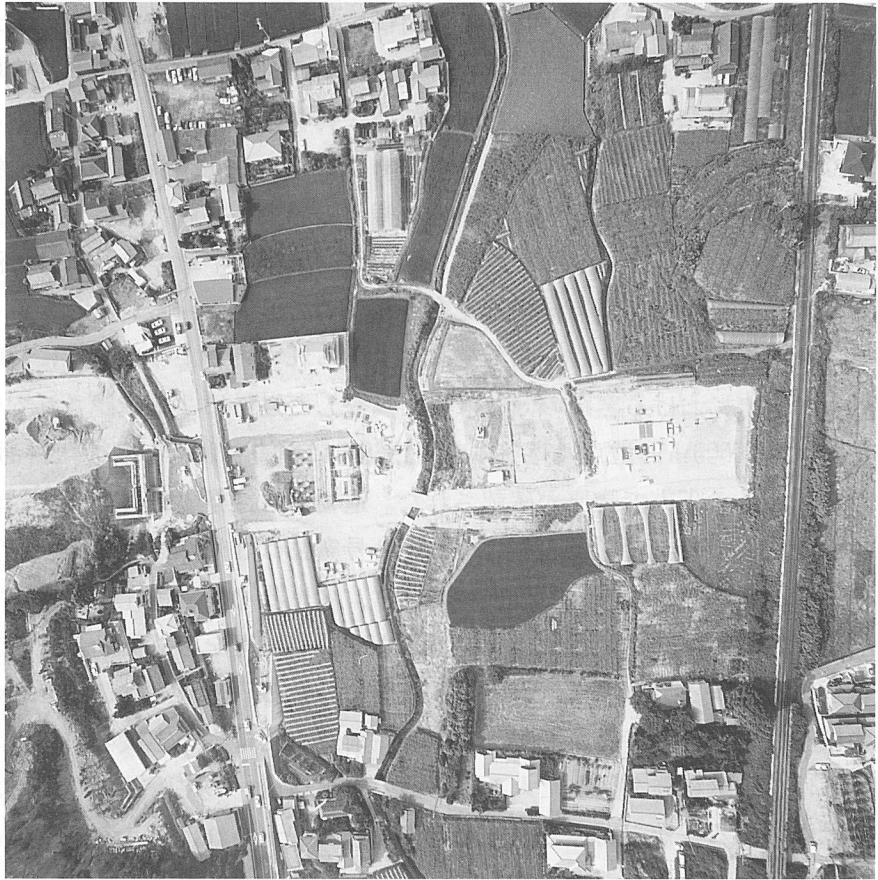


写真26 遺跡上空よりの俯瞰

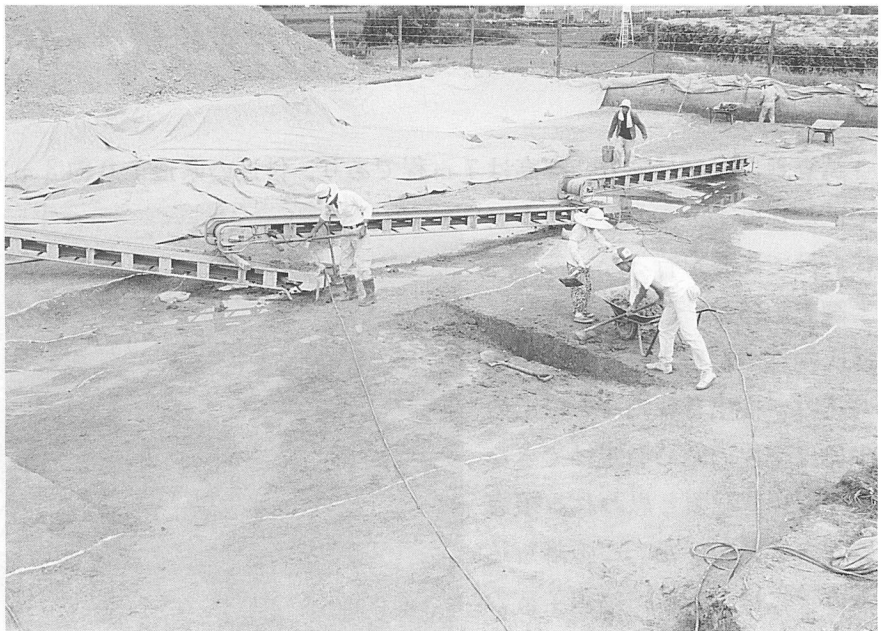


写真27 調査風景

3. 末3号窯跡

(1) 調査の概要

末3号窯跡は平成3年度に窯本体を含めた3,439㎡の調査を行っている。この際の調査については平成3年度の概報で報告している。SF01は尾根の東斜面に築かれ、最近の農道造成により大きく破壊されていたものの、窯本体の燃焼部・焼成部の一部及び煙道付近の底部が残存していた。この結果SF01は全長5.5m以上・最大幅1.3m以上の窯であったことが判明した。焼成部に上に堆積した砂の重なりから、最低3回の窯焚きが行われたと推定した。須恵器片もわずかに出土した。また、SF01周辺で溝や土坑・ピットを検出し、SF01に伴うものと考えている。

今年度の調査では前回水が溜まっていたため調査不可能であった溜め池部の調査を行った。これは前回A～F区と調査区を細分していたことから、G区と命名した。農道に相当するB区にSF01の燃焼・焼成部が残存し、その東A区は緩斜面で果樹園として開墾されていた。G区はA区の更に東で、南北50m・東西約11mの範囲内に果樹園の東端を含み、溜め池の崖と岸が主要な地形である。物原の検出を予想して調査に入った。

最初に3箇所東西方向のトレンチを設定し、溜め池の堆積土の状況を確認した。調査地の東端で

深さ約1.2mになる。堆積土は青灰色で上面に近づく程砂を多く含み、下部はシルト状であった。青灰色土上面に薄く堆積する細砂の中から須恵器が最も多く出土したがいずれも小片で、青灰色土内からはやや大きめの破片が疎らに出土した。ただし青灰色土下部からでも近世土器

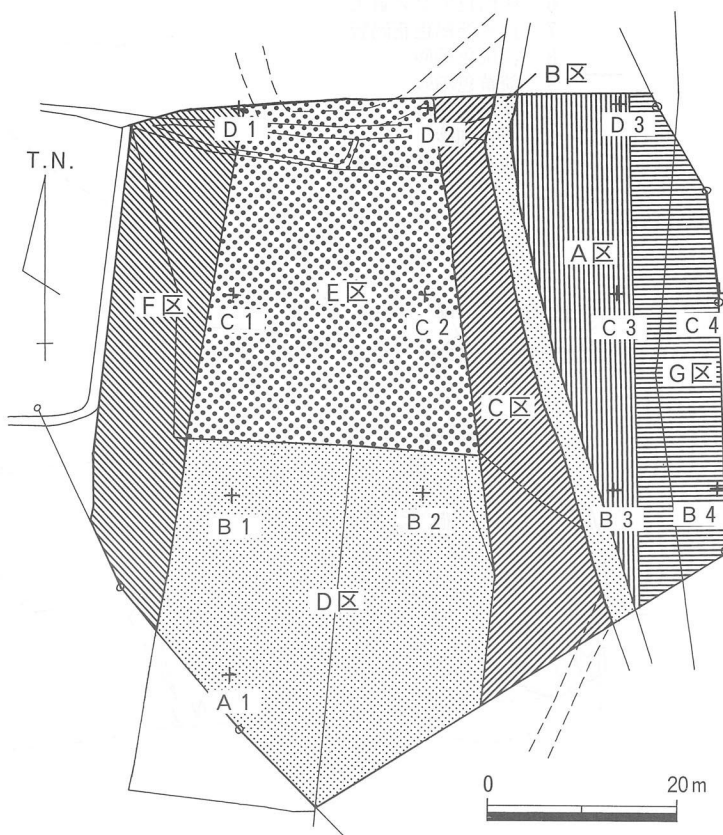


図40 調査区割り図 (1/800)



写真28 SF01完掘状況

- | | |
|--------------|---------------------------|
| 1 淡黄土色粘質土 | 14 淡褐色粘質土 (炭化物・焼土・灰色粘質土混) |
| 2 赤褐色粘質土 | 15 淡褐色粘質土 (炭化物・焼土・灰色粘質土混) |
| 3 褐色粘質土 | 16 黑色炭化物 |
| 4 褐色粘質土 | |
| 5 青灰色細砂 | |
| 6 灰白色ガラス質土 | |
| 7 白～淡褐色花崗岩 | |
| 8 淡灰色細砂 | |
| 9 淡黄色細砂 | |
| 10 淡灰色細砂 | |
| 11 灰色細砂 | |
| 12 淡黄～赤褐色粘質土 | |

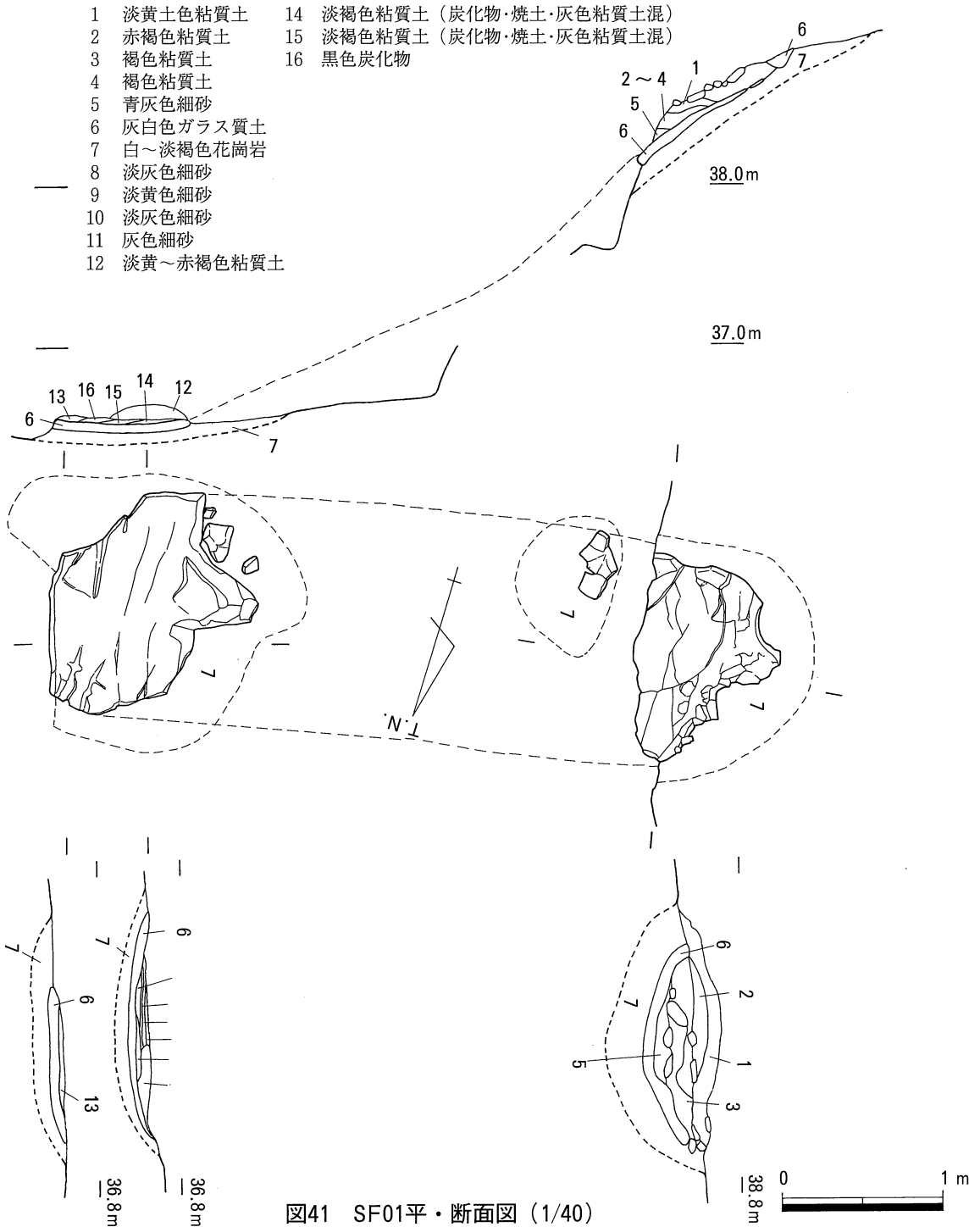


図41 SF01平・断面図 (1/40)

などが出土しており、この堆積土中にSF01当時に堆積したものは存在しないことが判明した。平面的には須恵器の出土はSF01の斜面下にあたる部分で最も多く、そこから北に向かって散布がみられた。逆に南1/3の範囲ではほとんど出土しなかった。SF01の斜面下に設定したトレンチでも上記のような状況で、物原に相当するような集中的な出土は認められなかった。よって物原は調査地内にはないと判断し、堆積土については須恵器の採集に主眼を置いた。溜め池の崖部は花崗岩バイラン土の地盤が露出しており、浸食されているようであったが、後述するように遺構が良い状態で残っていたことから比較的旧状を留めている。A区に続く果樹園部は果樹の株下に肥料穴が数列南北に掘り込まれているが、B区でSF01の底が残っていることから、これもSF01当時から大きくは変化していないと思われる。

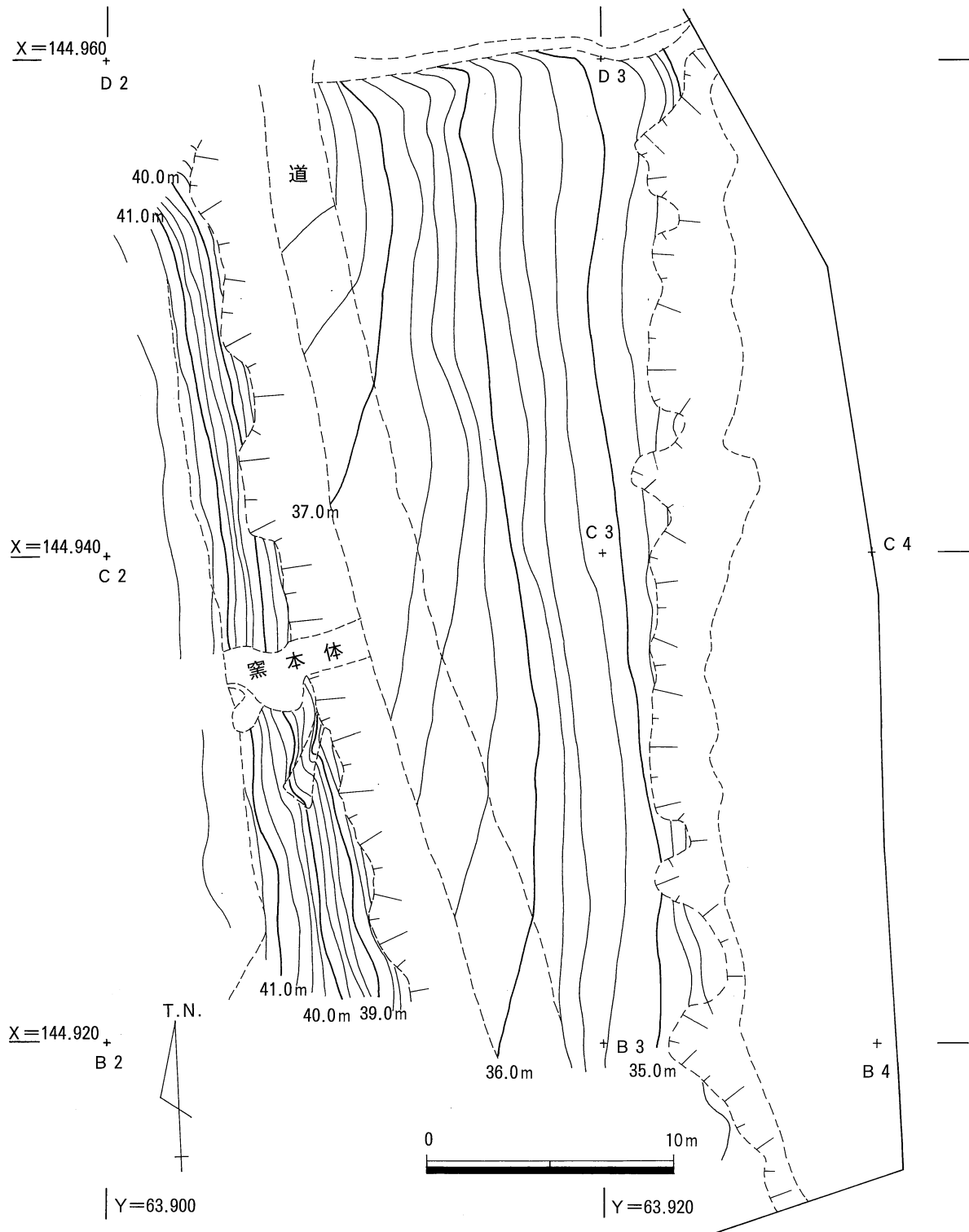


図42 東部現地地形測量図 (1/250)

(2) 遺構について

G区では溝・テラス状遺構・土坑を検出した。S D10はG区東部で検出した。溜め池の崖にあたる急斜面が終わり緩やかになった部分に、地形に沿い、ほぼ南北に掘られている。S F 01より17m離れている。深さ80cm・幅60cm程を保ち溝底も角ばっているため、見た目にも旧状をよく保っていると判断できる。南と北では浅く、調査区外で程なく消えてしまうようである。埋土は淡褐色の細砂質土で、雨水等により削られた土が斜面上から流れこんだような状況であり、自然埋没と判断している。中には須恵器が少量含まれており、埋土が溜め池堆積土とは異

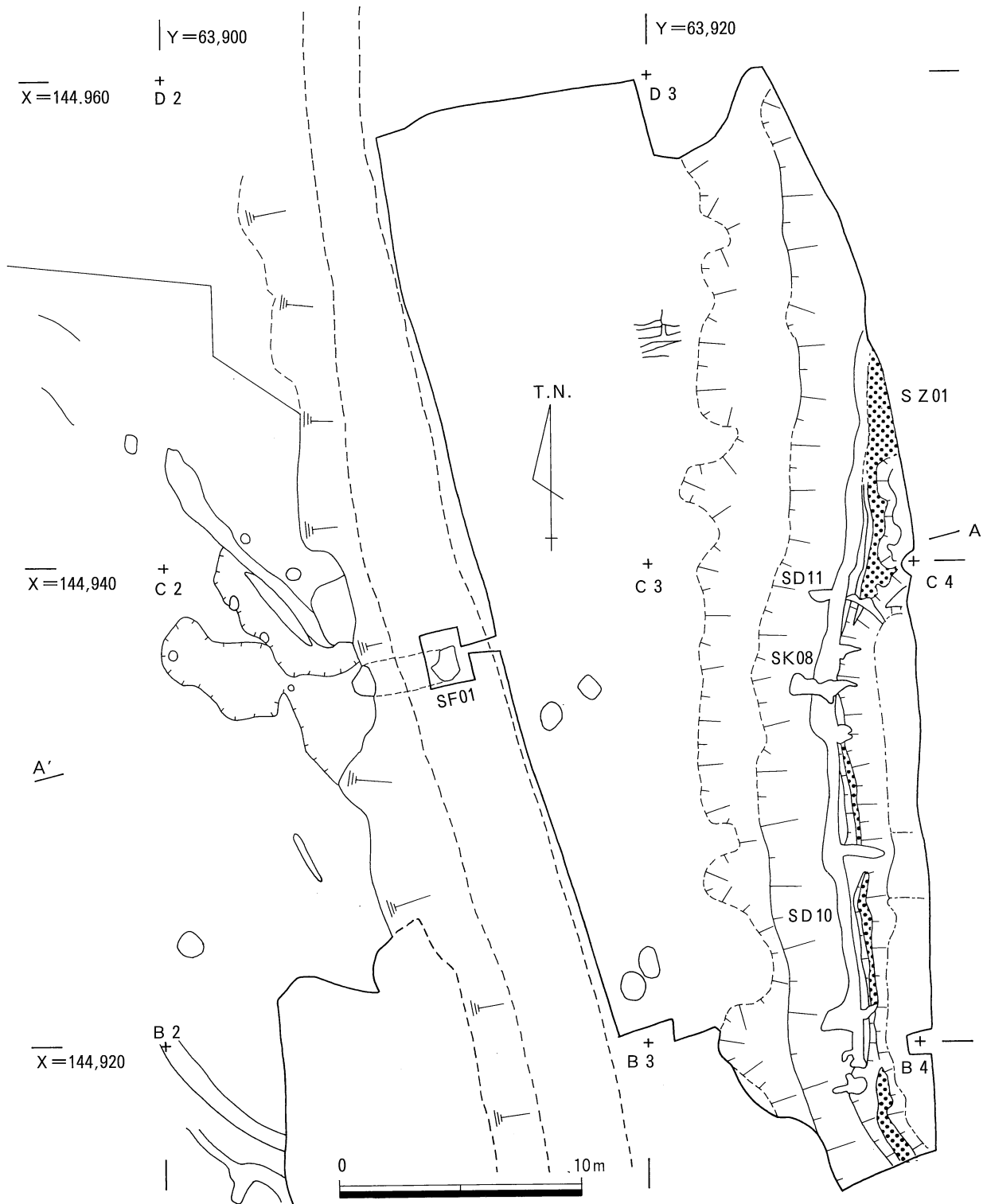


図43 東部遺構平面図 (1/250)

なることや、須恵器以外を出土しないことからSF01と同時期頃のものと考えている。SD10にはそれと直交の方向に数箇所切れ目が入られている。溝底まで達し、斜面下へと延びていることから排水を目的としたものと考えられる。とすればSD10は南もしくは北への排水の溝としては機能しないことになる。このことは溝底の標高がほぼ一定であることから窺える。SD10の機能については次に記すSZ01との関連で考えたい。

SZ01はSD10の斜面下側にSD10に沿って設けられている。幅50cmの平坦面であることからテラス状遺構と名付けた。図43では網目で塗っている。SD10から下は急斜面が少しあり、

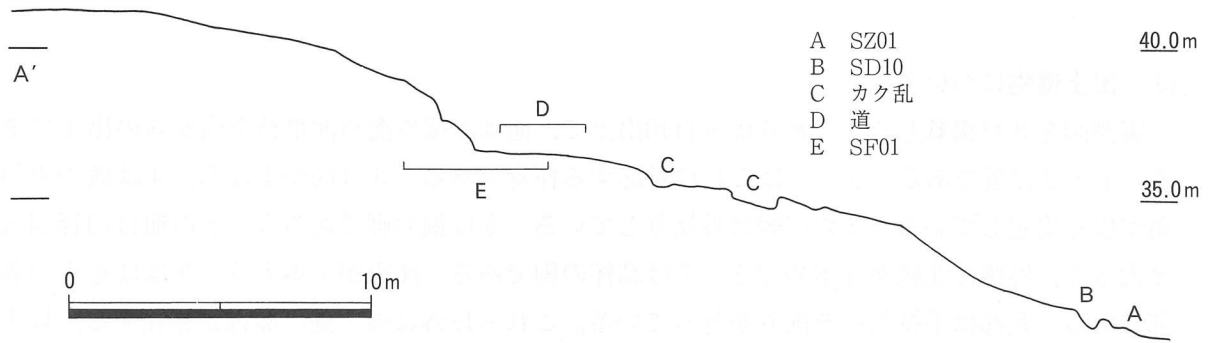


図44 東部地形断面図 (1/250)

この部分にS Z01が設けられていることは斜面の途中に立つことを目的としているように思われる。調査時にもこの平坦面を利用してS D10や溜め池堆積土の掘削を容易に行い得た。従ってS Z01は南北への通路としての機能を持っていると考えられる。S D10とS Z01が平行していることは両者が同時併存だったことを示し、S D10が排水溝でないとすればこれも一種の通路であったと現状では考えておきたい。



写真29 G区全景

S K08はS F01の真東でS D10と重なって検出した。S D10埋没後に掘られたというよりは、埋没する直前にS D10に直交する切れ込みのひとつを利用したような状況である。厚さ10~20cmの範囲から大量の窯壁片とそれに混じって須恵器片が出土した。須恵器はS F01と同時期であり、他の時期の土器片を出土しないことからS F

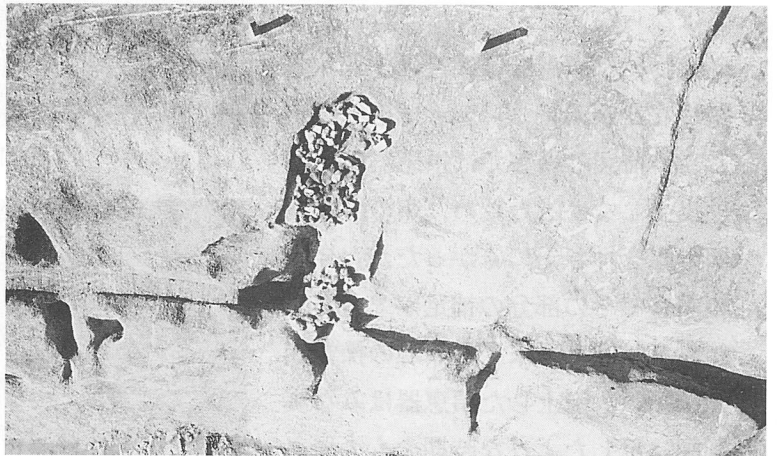


写真30 SK08とSD10

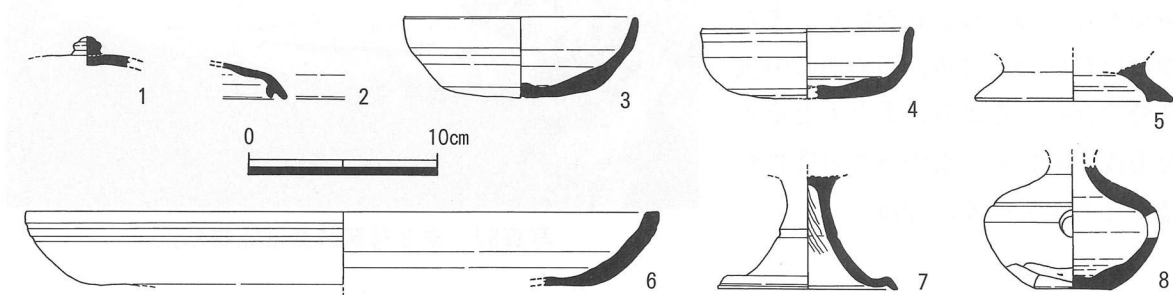


図45 出土土器実測図(1/4)

01からの廃棄物がまとめて捨てられたものと判断している。

(3) 出土遺物について

実測図を8点掲載した。3と6はSD10出土で、他は表採や溜め池堆積土内からの出土である。1・2は蓋である。3・4はこれに対応する杯身である。3は底がすぼみ、4は底の平坦面が広く安定している。4の口縁は外反りしている。5は椀の脚であろう。6の皿は口径34cmと大きく、外側に沈線が2本めぐり、7は高杯の脚である。沈線が1本入る。8ははさの胴部である。底部は手持ちヘラ削りを行っている。これら以外に壺・甕の器種が存在する。以上は蓋杯に古い形態のみられないことから、7世紀中ごろと考えられる。

(4) まとめ

2回にわたる調査により、窯本体のみでなく、周囲にそれと関連して作られた遺構も調査することができた。その結果、ひとつの窯をめぐって60mの範囲に関連する遺構が広がることが判明した。末窯跡群は1号窯跡が最も長期間にわたって操業されており、この窯跡群の中心となっている。また3号窯跡が操業された時期は3基とも操業が重なっている。これが須恵器の必要量を反映したものだとすれば、さらに長尾平野などの同時期の遺跡も探る必要がある。いずれにしても本報告ではそれら全体を視野に入れた考察を行わねばならない。

遺物では須恵器ほか近世土器・窯壁片などが28ℓコンテナ13箱分出土した。前回の調査では須恵器はあまり出土しなかったため、窯の操業期間の幅を押さえにくかったが、今回の調査でその部分の補足ができた。結論を言うと、末3号窯跡の操業期間は短い。出土した須恵器はみな実測図に示したような時期のものである。それ故に出土した須恵器の量は少なかったのかもしれないし、また物原はG区の更に東、溜め池の中央部分に存在するよりはもともとそれを形成するに至らなかった可能性が強いと考えている。(古野)

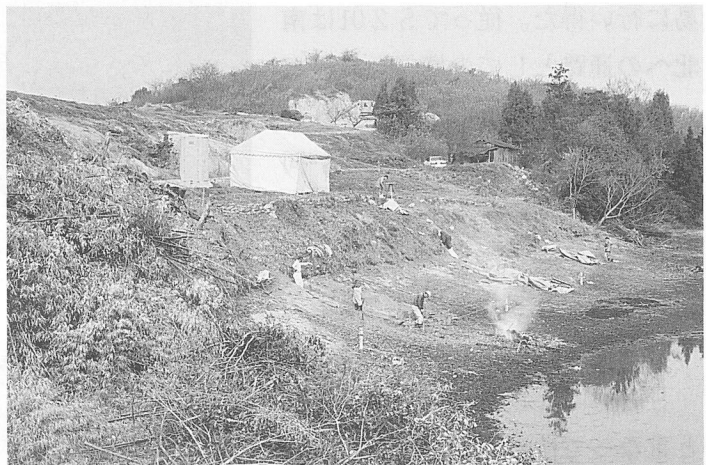


写真31 G区灌木伐採後状況



写真32 末3号窯跡東部完掘状況

4. 野牛古墳

(1) 立地と環境

野牛古墳は津田町神野667番地の4外に所在する。津田駅の1 km南西に盛り上がる雨滝山（標高253m）から北東に延びる尾根末端に立地しており、南東は石棺石材の産出地として知られる火山にさえぎられるが、東から北にかけては津田湾を一望する環境にある。その間平地部は狭く、海岸線に沿って水田が営まれている。

こういう土地条件によるためか平地における集落等の生活関連遺跡・遺構の検出はほとんどない。ところが古墳時代前半のみ前方後円墳を含む古墳が多く点在しており、かつ首長墓の系列がたどれることから香川県東部における主要な地域とみられている。この点についてはかつてから注目されており、これらの古墳の立地が海を見下ろす尾根の上であったり海際の小丘陵であったりすることから、古墳の被葬者が瀬戸内海の海上交通に係わる者であり、後半の古墳の急激な減少については3 km程内陸部に四国最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳が築かれることと関連づけて考えられている。今回調査した野牛古墳もこの状況からはみ出すものでなく、従来やや不分明であった首長の下に位置する階層の埋葬形態をより明らかにすることができたといえる。

なお野牛古墳の立地する雨滝山は西に雨滝山（奥）古墳群が存在し、また南にも小古墳群が点在する。中世には安富氏の山城として知られ、遺構の残存状況も良い。



写真33 調査前の古墳（中央）と津田湾

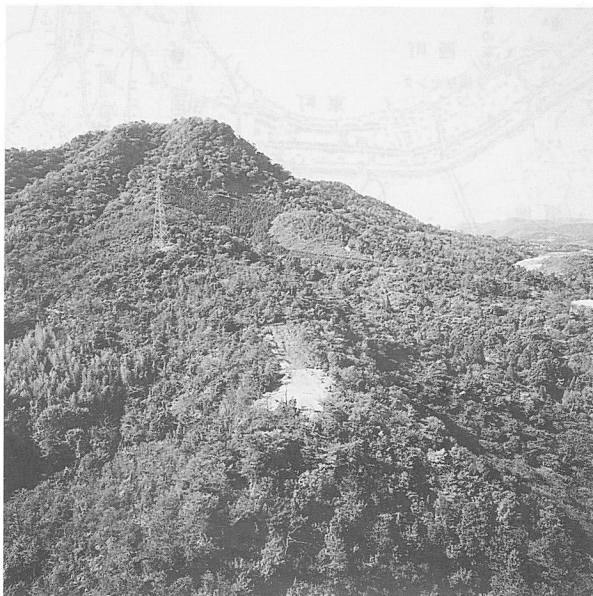


写真34 雨滝山と野牛古墳（中央）



写真35 野牛古墳から津田湾にかけての俯瞰



- | | | | |
|-----------|-----------|--------------|-----------|
| 1 野牛古墳 | 8 宮奥古墳 | 15 雨滝城跡 | 22 薬師堂遺跡 |
| 2 北山山頂遺跡 | 9 龍王山古墳 | 16 泉聖天古墳 | 23 赤山古墳 |
| 3 銅剣出土地 | 10 岩崎山1号墳 | 17 雨滝山麓遺跡 | 24 鶴の部山古墳 |
| 4 吉見稻荷山古墳 | 11 〃 2号墳 | 18 宮町東谷古墳群 | 25 鶴の部山遺跡 |
| 5 吉見弁天山古墳 | 12 〃 3号墳 | 19 柴谷古墳群 | 26 けぼ山古墳 |
| 6 北羽立古墳 | 13 〃 4号墳 | 20 時友遺跡 | 27 一つ山古墳 |
| 7 中峠古墳 | 14 黒岩古墳 | 21 県事務所敷地内遺跡 | 28 岡の端遺跡 |

図46 野牛古墳の位置と周辺の遺跡分布

(2) 墳形と規模

調査前の現況は尾根末端の最高地点に野牛神社が築かれていた。神社の前に石棺が露出していたことから、少なくとも石棺を覆っていた土は削られてしまったことは明らかである。しかし更に古墳として土がどの位の範囲まで盛られていたかについては不明であるといわざるをえない。尾根に直交する方向で神社の周囲にトレンチを入れてみたが、墳丘盛り土の残存や外部施設と思われるものは見つからず、また墳裾にあたるような傾斜変換点も存在しなかった。唯一尾根の東側で神社から2.5mの範囲に厚さ60cmの土が堆積していたが、中に瓦などが入っており、巨大な白蟻の巣が形成されていたことから、この土は以前壊された神社の廃土であり、建直しは白蟻が原因であろうと判断した。一方現在の神社の下にも神社を築くために10～50cmほど土が盛られている。後述するようにこの土の下から石棺の蓋石と思われる板石が出たため、この土についても神社基壇構築時のものと判断できる。ただしこれらの廃土や盛り土がどこからもたらされたかを考える必要はある。

石棺は蓋石が露出していたが、図49A断面に示すように棺の西側に厚さ40cmの盛り土が残されていた。この土が古墳（石棺）築造過程のどの段階で盛られたものかもう一つわからないものの、通有どおり墳丘盛り土後に墓壙が掘り下げられたものとするとも墳丘盛り土の残存ということになり、最低40cmの墳丘盛り土が行われたことになる。かといって分厚い盛り土がなされたことも現状からいえば考えられない。上記の神社の廃土や盛り土が石棺西側の古墳（石棺）築造時の土と似ていることから墳丘盛り土を削ったものとし、かつ副葬品が単なる石棺には不釣り合いなものとしても、墳丘の盛り土は全くなかったか或いは薄く盛られていたと考えておきたい。また墳丘盛り土があった場合の規模は、尾根の両側は59mの等高線を境にその下は傾斜がやや急になることからこの辺までに墳裾が収まるものとするれば最大直径20mまでになるであろう。地盤を整形して墳丘を作り出した可能性については図48をみると石棺から山側へ向けて地盤の標高が上がり、尾根を切断することによる墳丘の境がみられないことからなかったと判断している。

ここまでの分析は円墳であるとの前提で行ってきた。他の墳形の可能性は、津田湾周辺では前方後円墳か円墳しかみられないことからその他を除外するとして、前方後円墳にもなりえないと考えている。それは前方部の端部となる尾根の切断が上述のようにみられないこととくびれ部となる地形の変化が認められないことによる。

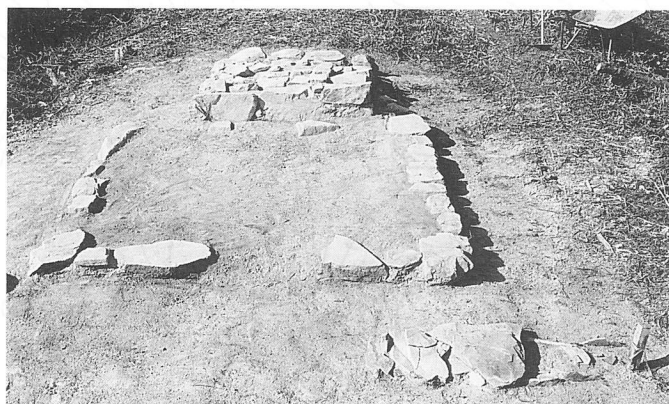


写真36 野牛神社基壇（神社解体後）と石棺



写真37 石棺周辺の地形（調査終了後）

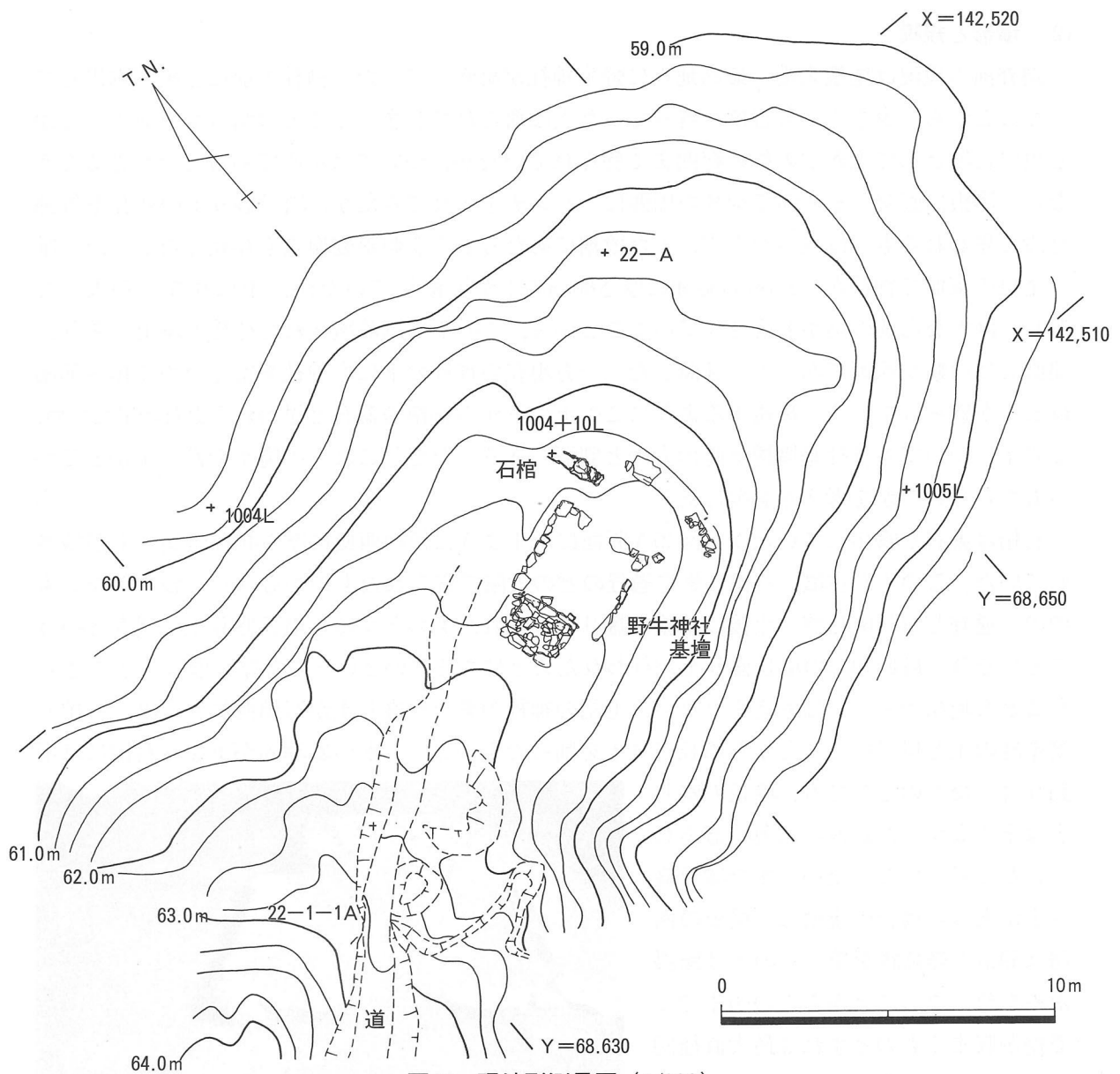


図47 現地地形測量図 (1/200)

(3) 石棺について

石棺は尾根の頂部に築かれる。方位は $N22^{\circ}W$ を向いている。

調査前から露出しており、北から1m程蓋石が存在せず、また北側の端石とそれに接する東側の側石が抜かれていた。開棺部は土で埋まっており、この土を除去するためトレンチを入れたところ、北側で鏡の縁にあたった(図49Cライン)。このため慎重に掘り下げていったところ鏡1の他玉類が出土した。これらの遺物は図49C断面にあるように埋土の中で床から5cm程浮いた状態であった。埋土は周辺の土と同

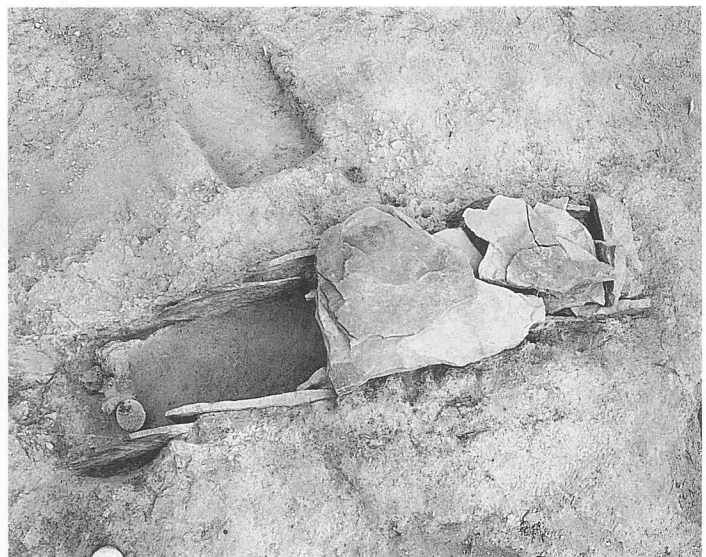


写真38 蓋石除去前鏡・玉類検出状況

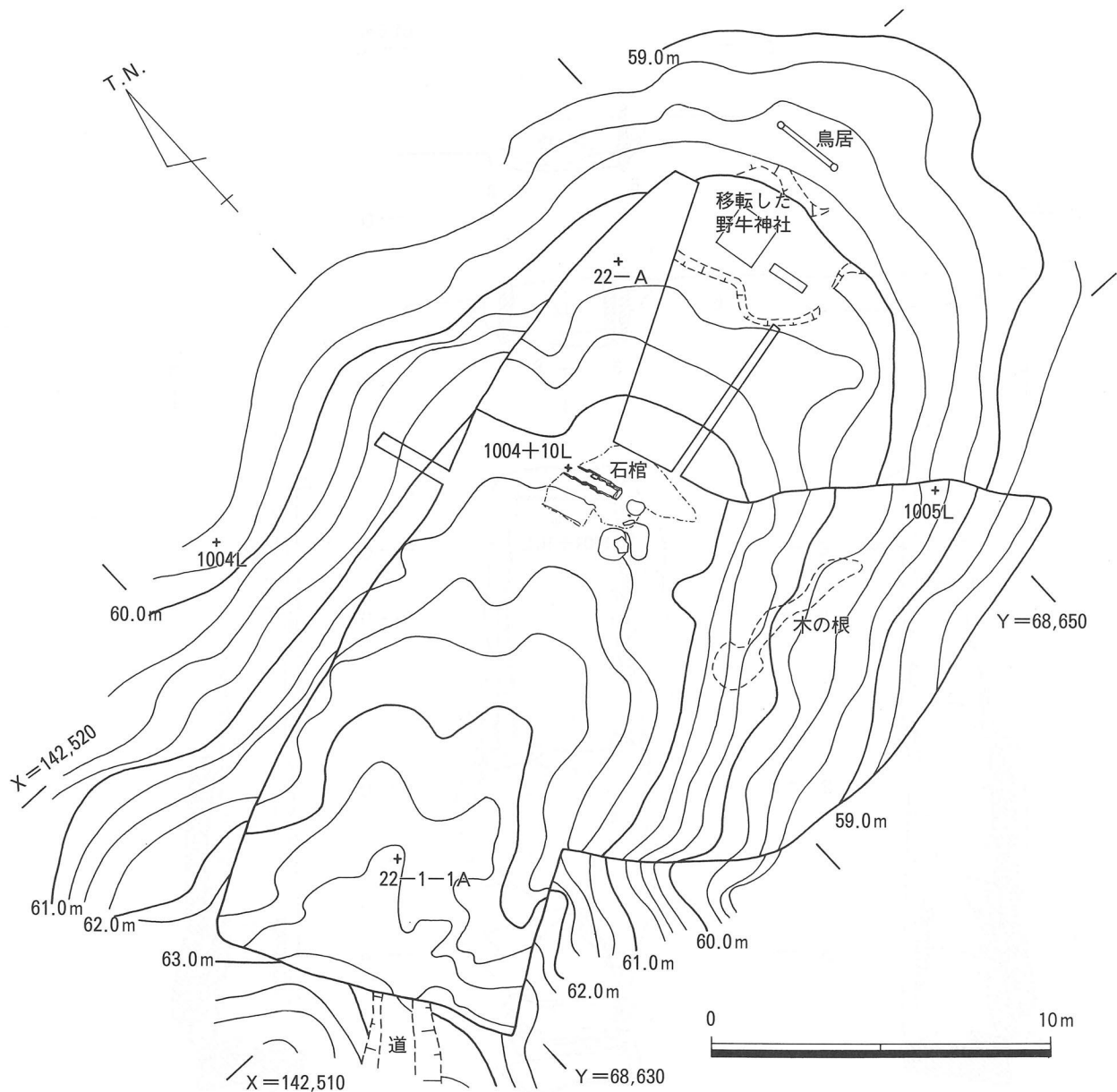


図48 旧地形測量図（枠で囲んだ部分のみ旧地形露出。1/200）



写真39 開棺部埋土トレンチ内鏡検出状況



写真40 鏡・玉類出土状況